檢出し難いものの索引

あ

ああさぶこさぶ猿の衣服　五〇七
ああ降つたる雪かな　四一五
愛着の道その根深く　四六一
哀愍自謹のみぎん　四〇九
銅の爪をとぎ立て　三九八
赤きは酒の科ぞかし　四〇〇
あかざのあつもの　四六一
明石の浦もかひ無かりけり　四四七
曉の明星が西へちろり　四三九
曉梁王の園に入らざれども　五四九
あかぬ別れの　四五三
あがる雲雀の影を追うて　四八二
秋風越ゆるは須磨の關　四二〇
秋風にすすき釣る　四七四
秋風の音にたぐへて　四〇〇
あき篠や外山の松よ　四五三
秋に後るる老葉は　四一七
あきのあふぎ　五五二
秋の風さつさつせうせうとして　五二三
秋の田のかりほの　四六五
あきのほたる　四六七
秋の夜の杯　四〇六
秋よりさきに必ずと　四一七
あくきにふごしん　五七五
あくじせんり　五三四
惡風吹掛け眼もくらみ　四一九
飽くまでに食ひ煖かに着て　五四一
明くるわびしき莨城や　四四九
明けて悔しき浦島の　四八二
明けて悔しき玉手箱　三九九
朱を奪ひし紫　五四六
朱を奪ふ名を立てて唐人は　五四六
あこがれいづる玉の緒　四四六
あさかのぬまのはなかつみ　四三六
あさ木　五〇九
あさくは人を思ふものかは　四七四
あさくらやきのまるどの　四五三
麻に連添ふ蓬　五三四
あさはらの丸藥　四八二
朝政し給はず　五三九
淺間の嶽に立つ煙　四三〇
あさみどりといふ柳樽　四四七
あしかれと思はぬ　四四九
阿字十方三世佛彌字一切諸菩薩　五七五
朝一片の雲に咽び谷には　五四一
あしたたぬ神の　四七四
あしだの笛に寄來る　四六一
あしなじゆ　五七四
足の裏の疵にこたゆる小笹原　四八二
蘆の節の間も　四五三
足元を見る　四八二
飛鳥川の人心　四三七
汗の如き綸言　五四四
安宅の關守欺きし　三九五
愛宕花見に袖を引かれた　五〇七
愛宕參りに袖を引かれた　五〇七
あだし野の露消ゆる時なく　四八一
當つて碎くる男　四八二
あだなりと名にこそ立てれ　四三七
直千金の春べ　五三八
あたら櫻の科は散るぞうらみなる　四〇五
味もしやしやりもおぢやるまい　四八二
預る者は半分の主　四八三
あつきにふごしん　五七五
あづさ弓取傳へたる　四六八
あつばれ御馬候や　四七一
吾妻請出す　五〇七
吾妻の物語　四六六
跡なくなりし　四四六
後は野となれ大和路　四八三
跡を濁さぬ水の面　四八三
あなにゑや　四六四
嫂水に溺るるとき　五四一
あのくぼだい　四七一
逢はずは何を玉の緒　四三七
あはたぐち　五八四（五九八）
淡路潟通ふ千鳥の　三九七
阿波の鳴門の波風も　四七四
あはれと思へ袖櫻　四六五
あはれともいふべき人は　四六五
あひえんきえん　四八三
逢ひた見たさの唱歌　五〇七
あひのて　六二八
間の山節　五〇四
あふ坂の知るも知らぬも　四〇八
逢坂の鶏の空音か　四七一
逢坂山のさねかづら　四六五
油壺から出すよな　五〇七
尼御の血を狂はすは鮪　四八三
雨乞の小野小町　四七四
天つ風雲の通路　四六五
天照大神に奉る四月九日の神御衣　四七四
あまの川苗代水にせきくだせ　四三三
天の羽衣まれに來て　四一五

あまよのものがたり　四一〇
網の目にさへ戦風がたまる　四八三
天地を動かし鬼神を感ぜしめ　四三七
雨に着る田蓑の島　三九五
雨にはあらでヤこれのこのこの　五〇七
雨による田蓑の島　四〇八
天の下(した)皆めて陳ねし　四七四
雨降らば降れ　四七四
雨をふくめる孤村の樹　四四八
怪しきを見て怪しまされば　五五二
あやなし　四三七
過つては改むるに憚ること勿れ　五四六
謬つては半日の客　四〇六
歩を運(あゆみ)ぶ神垣や　四一四
あらうみの障子　四〇〇
あら心なの村雨やな　四二六
あら頼もしの御歌や　四一〇
あらはれ渡る　四五六
洗物師の蛇の目後家　四八三
あらめづらしやいかに義經　四一九
有明の月をうかがふ猿　五六六
有難し慈悲萬行の春の花は　四一三
ありとは見えて園原や　四五三
蟻の穴から堤も崩れる　五五二
蟻の如くに集りて　四六一
ありのすさみにくかりし　四七四
蟻のすさみの浮世のさま　四六一
蟻は五日の雨を知る　四八三
在原のかの中將の詠歌　四二七
在原の中將なりしまめ男　四三〇
在原の優男(やさおとこ)　四三〇
有馬の湯のだんこ　五〇七
ありまふで　三六二
有馬山松になりたや　五〇七
ありまやまゐなの　四四六
あれそのそこに白く咲けるは　四三八
荒れたる宿　四三七
あればある世の命　四七四
藍より出でて藍より青し　五三四
あをかりしより　四四四
青きが原の浪間より　四一四
安樂世界より今この娑婆に　四一〇

い

いうえんくわんしよ　五四六
遊子なほ殘月に行く　五四九
遊子伯陽　三九八
言うて歸らぬ死出の旅　五〇八
いかしほこ　四六四
いかで笠置の　四五六
生身(いきみ)に餌食　四八三
生身は死身　四八三
生田の川に身を棄てし　四七三
異國(いこく)のしんじが　四七四
いざ鎌倉勢　四八三
勇む心の生駒山　五七五
石川や濱の眞砂は盡くるとも　四八〇
石龜もぢだんだ　四三六
いしだがくび　四八三
石に謎かける　四八三
いしやうのくわい　三二九
石を抱き淵に入鹿　四八三
伊勢衆でないか　五〇八
いせといへる文字をば父母と　五七五
伊勢武者は皆緋縅の　四六八
急げば廻る　(四七四)(四八三)
五十年(いそとし)の榮華　五五三
いそのかみ　四三七
磯邊の千鳥ちんりちりちり　四三〇
鼬(いたち)の道切　四八三
一遊一豫　五四一
一一文文是眞佛　五七五
一榮一落春秋　五三三
一河の流れも他生の緣　五六五
一か八か　四八三
一眼の龜の浮木に値ふ　五六八
一藝に名ある者は庸ひられずと　五三三
一樹の緣　五六五
一洞空しき谷の聲　四二五
一年三百六十日　四七四
一念の佛性三世十方に通達し　五七五
一念彌陀佛卽滅無量罪　三九七
一念無量罪　四五八
一富士にたか　五〇三
一粒(りふ)の花の種は地中に朽ちず　四〇八
一輪も下らず　四一三
いちゐん　四二四
一を以て萬を知る　五三四
一行失すれば百行共に傾くとや　五二八
一家仁あれば一國仁を興し一人　五三七
いつか都へ歸る山　(四五一)(四五二)
いづくの松も　四五三
一見卒塔婆永離三惡道　五六六
一犬吠ゆれば萬犬の聲聲しき　五五二
りに
いつさいしゆち　五六五
一子出家すれば九族天に生る　四八四
一しやふとくさぼんでん　五六八

一首の歌　四七四
一心稱名觀世音菩薩卽時觀其音聲　五六八
一心頂禮萬德圓滿釋迦如來信心舍利　五七五
一寸先は暗　四八四
一簞の食一瓢の飲これ顏回が樂しみ　五四六
一張の弓の勢　五四九
五つの塵六つの欲　五七五
鷸蚌の鬪戰　五三七
僞のなき世なりけり　四七五
いつはりのなきを　四五三
出づるに聲し入るに蹕す　五二九
いで其の頃は壽永三年　四〇〇
いとし男と隔てて住めばのいとせめて戀しき時は　五〇八
暇申して歸る山の　四三七
絲屋の小絲姉は十三妹は　四三七（四三八）
絲よりかけて白露を　五〇八
絲を引いて文字を導き　五五三
稻荷の山の薄紅葉　四二七（四四四）
古の君子これをもつて自ら　五三三
古の聖代に臣五人あつて天下　五四六
古の德ある君は非情の松も　五三〇
古の奈良の都の八重櫻　四四九
古の鎧にかはる紙衣さへ　四七五
古は一夜とまりし宿までも　四〇七
古を以て鑑とすれば興替を知り　五三八
犬が食ふ　四八四
戌で丁六十うろたへ　四八四
犬の長啼き　四八四
狗は獸を追うて殺し人は　五三〇
犬も傍輩　四八四
命がつらき老後の恥　四三四
命長ければ恥多し　四六一
命を棒に振る　四八四
祈らずとても神や守らん　四七五
岩木さへ引く手に寄り來る　五〇八
岩木を分けぬ人心　四〇七
岩に碎けてわれても　四四九
言はれば腹ふくるるわざ　四六一
巖の肩の苔衣　四一四
いひきにてすいちやゐんちや　五〇八
いぶきの艾屋　四四六
家に爭ふ子なければ　五二一
いほはた立てて　四七二
戒めずして成るを親る　五四八
今世尊の說法は　五七〇
いまゐずし　四〇二
妹背も猛き武士も心柔か饅頭や　四三七
いよこの　五〇八（四五一　五〇八）
いよし御見と書いたるは　四〇三
いらつて熊坂さそくを蹈み　四三七
色こそいはれ山吹の　四三七
色こそ見えれ河與が悅喜　四六四
色好まぬ者は玉の盃　四三〇
色に身代宇津の山　五四六
色の德には隣あり　四三〇
いろはにほへどちりぬるを　五七五
色ほかにあらはる　四二六
色よき紅葉を踏散す鹿　四六五
陰陽の氣まづ亂れて　五五三
陰陽の鞭　四七五

う

ういへんせん　五三八
有緣無緣乃至法界平等　五七五
うかんろほふうみんしゆじや　五七四
うこ　五六八
浮木の龜　四八四
憂き鹽ふむ　四一二
浮きたる雲の行方をば　四〇三
浮世の旅に迷ひ來て　四五六
うき世の民におほふかな　四五六
浮世の富貴は浮べる雲　四三七
浮世の淵瀨常ならぬ　四七二
鶯の卵の中の時鳥　四七二
鶯の子で子にならぬ　四四九
うぐひすの聲なかりせば　四七二
鶯の巢で育てられ　四三七
鶯の縫ふてふ　五四一
うくわく
右近の橘の昔の契りは忘れじもの　四三七
有相修因より　五六〇
兎死すれば狐これを悲しむ　五五三
牛に汗す　五五三
牛の角文字　四六一
牛牽歌　五〇四
憂しや思ひ出でじ忘れんと　四一九
後指を指さる　四八四
牛若君の角文字に　四六一
牛を割くに雞の刀を用ゐんとや　五四六
うすからきね　四八四
薄霧の籬の萩の　四五三
臼蹈歌　五〇五
羅の扇に撲つは秋の螢火　五二七

歌祭文
歌説經
うたてやなあれ御覽ぜよ
歌に詠むてふ文字が關
歌に六義あり
歌念佛
歌人の評判つけ置きし
うたふ聲にも血の涙
歌へや歌へうたかたの
歌よむ蛙
打たるる杖もゆかし
氏無うて玉の輿
内に怨の女なく外に嬢しき夫なく
内に土木の氣を養ひて
宇治の川霧たえだえに
氏より育ち
打渡すをちかた人に物申す
打つたり舞うたり
うつぼ
鵜とならんと詠じけん古歌
うつりにけりないたづら者め
うつり行く心の花の
うとふやすかた
うなゐをとめ

鵜の羽を茅に
うのめたかのめ
うばう
奪ふも紫
うはらたつもも
上越す人もなかりしに
馬が太鼓打つ
馬がでんでん打つ
産まずの數ならば
馬に七箇の祕事
馬に任する道しるべ
馬はあれど明日の軍
馬はあれどもこの身には
生れた後の早め藥
海山一同に震動して
うらがはら
羨しげに松の木の
瓜を獻ずる榮花
うれしやとうとうと鳴るは
愁を掃ふ玉箒詩を釣る釣針
有爲轉變
植ゑい植ゑいさ乙女
魚と水
魚は廣きを愛し鳥は深きを
うんたらたかんまん

雲雷鼓掣電念彼觀音

え

榮啓期が三樂を歌ひしにも
瑤臺霜滿てり一聲の玄鶴
えきしやさんいう
えさうふぼくのたましひ
えしやう兩輪の火の車
得手に帆
海老釣歌
葉公龍を好んで云云
えやはいぶきの艾屋
襟に附く
えんいつこんて
えんし
捐捨國位僕從妻子
炎帝
緣につるれば唐の
閻浮にかへる生死
閻魔卒三魂を縛して關樹下に至る

お

老いせぬや藥の名をも
老は憂き身の
おいゑんきや
おうくわん法界
負うたもいとし抱いたもいとし
應無所住而生其心邪正一如
お梅に通を失ひし
お釜を打起す
沖つ白波さばけて忍べ
沖つ白波立つ
沖に戀路の
おきまどはせると詠みけるも
おきもせず寢もせで
おくしもや白きを見れば
奥山に紅葉踏分け鳴く鹿の
奥を聞かうより口聞け
おことは都詞狂女と見えし
矜は愚人の病にして禍その身に
お島も隱れ島隱れ
おせつなきやうほつぼだいしん

遲牛も淀　四八五
恐しや幣帛に三十番神　四〇一
落ちくる瀧の音羽の嵐に　四一四
落ちて三途の川となる　五〇八
落つる物梅ありその花七つ八つ　五三三
音羽山關のこなたと詠みたれど　四三八
同じく惜む春なれや花を　五四九
同じ寶の鼓をすゑ　四一三
同じれを鳴く鶯の　五〇八
お名をばえ申すまいよの　五〇八
鬼に鐵鎚　四八五
鬼に衣　四八五
己が古郷の北風に勇んで嘶ふ
勢や　五四三
おばしま　五四三
大君きませ聟にせん　五〇八
おぼつかなくも呼子鳥かな　四四四
おほぬさの　四三〇
大びえや横川の杉の梢に棲みて　四〇七
おほゆな　三六二
おまへ　二四一
重きが上の小夜衣　四五三
面白の花の廓や　四一四
面白の花の都や　四一四
面白や實相無漏の硯の海に　三九九
重荷に小附　四八五
思内にあれば色外に顯はる　四二六
思ひきれとは死れとのことか　五〇八
思ひぞ出づる浦波の　四一九
おもひたつ木曾の麻衣　四七五
親子は一世　四八五
親の心闇にはあらで　四四七
親の涙は火炎となり　四八五
親を殺せし惡人は一萬八千人　五六一
おらが若い時や　二
愚に拙き人も時に遇ひぬれば　四六一
愚かの人の有樣や　四一一
おんあびらうんけん　五七六
おんあぼきやべいろしやの　五七六
おんころころせんだりまとうぎ　五七六
恩の死はせれども　四八五
おんらが在所はの　五〇八
おんをのりびしやちい　五七六

か

かいこそ和田のそこづつを　四四五
海底の魚は深けれども　四七〇
かいらうどうけつ　五三一
かいりやうまんぞく　五七六
項羽高祖の戰に虞氏が涙の　五三〇
項羽が山を拔く　四八
かうがい　四一九
耿耿たる燈火も共にあはれむ　五四九
幸左衞門　四八五
がうさんぜ　四四七
柑子は蒸せる粟の餅　四八五
かうたい　五六一
江南の橘江北に植うれば　四六一
江南離別の夕の雨　四一一
かうにきる　五七六
孝は百行の始　五七六
かうべに挿せば　四三六 五三三
かうや六十なち八十　五五〇
亢龍悔あり　四八五
高嶺天に横はり　五三一
かうろのゆき　五三〇
嚢が出花の相場が　四八五
かかれとてこそ　四四七 四四八 四七五 四八二
かきのもと島屋をちよつと島　四三八
隱れ
餓鬼は水を火と見るとや　四七五
餓鬼も人數　四八六
鉤を竊む者は誅せられ國を竊む　五三五
鷽鳩の小鳥が九萬里の空を　五三五
かくとだに　四四六
かぐつち　四六四
如是我聞きき九土まちまち　六九 六五七 三九六
に別れ
かぐら　五七六
懸くる佛の御手の赫　四四五
景清これを見て物物しやと　四七五
景清と三保の谷の鑁　四〇〇
景清はかく魚の鱗を眼に張り　四〇〇
かけずたまらず　四七五
かけども盡きぬ松の葉　四〇七
笈に流す水車　四〇九
籠の鳥　四八一
籠の中の鸚鵡櫺檻に順つて俯し　四八六
笠がよく似た菅笠の　五四三
笠置山ゆるぎの森も近ければ　五〇九
かささぎのはし　四五六
笠に挿いたは梛の葉　四五三
重れ文字　四二九
かさのした　四六一
かさやさんかつ　四二八
柏散るてふ卯の花や　五〇九 七六 四五二

柏屋さがははすはにござる　五〇九
柏屋通れば二階から　五〇九
鹿島事觸　五〇五
佳人盡く晨粧をかざり　五四九
歌人の家のことぐさは　四三八
歌人は居ながら諸國　四八六
嘉辰令月歡び極りなし　五四九
春日の里も近ければ若紫の色　四三〇
　深く
春日野や若紫の摺衣　四三三
かすりゐの水　四八一
風狂じたる秋の葉の　四一七
稼ぐに追ひ付く　四八六
かぜくふ　四八六
風新柳の髪は梳る　五四九
風そよぐならの小川の　四六六
風の掛けたる棚　四三八
風破窓を射て燈火消え易く　五四〇
風は虎の嘯くに從ひ雲は　五五二
風吹きしのく忍草　四一七
風吹けば沖つ白浪　四三〇
風綠野に敢まつて煙條直し　四一八
片絲の絲よりかけて白露を　四三八
かたがいかる　四八六
敵に心をとらかせし　四〇三
片削ぎの千木や　四七五
肩で風切る　四八六
刀して削りなすかうらんの　五三〇
肩にかるもの花折りかけて　五四九
交野のみ野の櫻狩　四五三
かたみこそ今はあだなれ　四二〇
形見の烏帽子　四二〇
肩も怒る　四八六
かたを波　四七三
かぢを絶え　四六七
渴しても盜泉の水を飲まず　五四四
かつみ　四三六
葛城の神　四〇一 四四七
門田の早苗よなぜなぜ　四三八
門に立つたは忍びの夫かえ　五〇九
哀しみを含んで　四五七
鼎には青山數片　三九八
金岡の大納言が書きたる馬　四八六
鐘打つ　五五二
金にして數は九つ　四〇九
鐘の供養に參るらむ　五〇九
鐵の鳥居のきざはしを　四一七
鐘は閑雲を隔てて　四〇三
兼平とは木曾殿の御内に　四三一
鹿子斑と詠じけん富士　五九九
彼の白居易に泣かせたき　五四六
夏は殷の昔殷は周の昔　四八六
皮か身か　四八六
かはだち　四八六
川中島の四段目　四五一
川流れであらうが　四八六
河舟をとめて逢ふ瀨の波枕　三九九
下邳に授かりし黃石公が奧儀　四八六
かひをつくる　五三〇
かふがしやりになる　四八六
かふにきる　四八六
かぶん　五四六
返す時の閻魔　四八七
かべにうまのりかける　四八六
壁に茶壺　四八六
壁に耳　四八七
歸る處を知らんとて　四三一
かべをうがつ　五五二
歸去來とて古鄕へ遁れしは　五三三
鎌足の大臣玉を取る　三九七
釜の鳴る擘薪のさつしよ　五五二
上野や佐野の船橋取放れし　四一五
神鳴も思ふ中をばよもさけぬ　四三八
上に居て驕らず、下として亂
れず　五二一
神のみことの　四四五
神はうけずやいやましの　四三一
神は二階へあがらせ給へ　三九八
神は人の敬ふによつて　四七五
瓶は谷連一滴の水を納め　三九八
かやはかくるる　四三八
かややのあめ　四八七
通ふ千鳥の淡路町　四三三
からくりまと　四九六
韓くれなゐの水くくる　四三一 四三七
からころもきつつ　四三一
鴉がな鴉がな浮氣鴉が　五〇九
からすなき　四八七
烏に反哺の孝あり　五三九
唐へ投金　四八七
がらり　七二一
雁一疋さへ矢は三錢　四八七
雁がれの裂の文　五二一
雁鳴きて萩の下葉も　四六一
狩の文字を四季に書きわけ　五五二
假のやどりに心とどむな　五二
雁よ新町の花を見捨てて蜆川　四三八
借る時の地藏　四八七
刈るならば千束も　四四八
枯れたる木　五六五

柯を伐り柯を伐る其則遠からず 五三二
閑雲鐘を隔つ 四二六
額回は早く夭して終に四十の 五三〇
岸花紅に水を照し 四〇五
かんくわせきやう 五三二
諫鼓苔深うして 四二五 五四九
かんざきのたへ 四七五
甘棠伐ること勿れ 五三二
かんたんのまくら 五三三
かんたんのゆめ 五三三
かんていの松の風 四一三
漢の高祖は紀信が命をすてて 四五八 五三〇
こそ
漢の高祖は義帝を尊んで 五三〇
漢の光武帝は一日に千里の馬 五三八
漢の武帝元鼎五年蛙鬪つて 五三四
漢の武帝の時昆明池といふ池に 五三三
滿原宿の約束 四五一
かんやうきゆう 四一二
咸陽宮の琴の音 四〇三
かんりんほくばう 五五三
かんろほふう 五六八
漢王二星の契を學び 四一三

き

きう 三七九
きうくわちやう 四一三
九華の帳を押のけて 四二四
牛溲馬勃敗鼓の皮 五三三
きうぜんのやうりう 五二七
ぎうちよきしつ 五五一
舊里を出でし鶴の子の 四〇七
きおんにふむゐ 五七六
木から落つ 四八七
歸雁列を亂るなる隱し勢と心得 五五三
聞きに北野の時鳥 四七五
菊離のもとに手折りては 五三三
きけんじやう 四〇三
岸打つ浪のおのれのみ 四六六
岸の平砂を白波に照せば 五四九
きしん 四五八
鬼神に横道なし 四〇〇 四八七
疵なき玉の巵 四六一
貴賤と親疎を論ぜぬを 四〇四
氣違のこぼさぬ水 四一八 四八七
吉凶は人に由つて 四六二
狐虎の威を假つて百獸を從へ 五三七
狐の奉り御名にしおふ利劍の鎌 五七六
狐は死して岡部の六彌太 四四四
狐蘭菊にかくれすむ 五三九
木津や難波の海面に 四〇〇
きではなこくる 四一三
きではなもぐ 四二四
着馴れし衣逆樣に返して 五三三
衣笠山に白布引きはへ 五二七
きぬた 五五一
衣は紅梅 四〇七
杵であたり杓子で當る 五七六
きのはし 四八七
昨日といひ今日と暮して 四七一
昨日の花は今日の夢 四三九
昨日は北闕に悲しみを蒙る 三九七
者婆が良藥かなはずして 五三三
者婆童子は藥王木を得て五臟 四三六
を照し
木は繩を以て直にし君は 五四九
きふきふによりつりやう 四七六
君が一日の情に妾が百年の命 五七七
を失ひ
君が盃いつも飲みたや 五三五
君が爲惜しからざりし 五〇九
君が代千代に八千代に 四六六
君が代の年の數をば 四三九
君君たらずとも、臣以て 四五三
君君たれば臣もまた臣 五二一
君とならびの池にこそ 五四六
君と我が寢る常夏の花 四四七
君辱かしめらるる時んば臣死す 四三九
君は禮を以て使ひ臣は 五三三
君は早稻米我や唐白よ 五四七
君みやう 五〇九
君を擇んで事ふ 三九五
君を待つ夜はよやよやよ 五三三
きやうげんきぎよ 五〇九
强將の下には弱兵なし 五三九
經には頭目髓腦と說き 五三八
京の吉岡紙子染 四五一
京橋 四七八 五九六
揭諦揭諦波羅揭諦波羅僧揭諦 五六七
木遣音頭 五〇五
宮前の楊柳寺前の花 五一七
窮民を養ふは古の道 五一一
きよういう 五五三
喝々 五七六
曲をへて人見えず 三九八
漁陽の鼙鼓 四五八

きよりくりう　四五七
ぎよりよう　四七〇
きよれいふまい　五三七
桐の葉落ちて飛ぶ螢思ひ悄然たる　五三九
錐は囊　五三〇
霧は不斷の伽羅　四六八
祇王が段　四六八
木割歌　五〇五
義を見て爲ざるは勇無し　五四七
ぎをんしやうじや　四六八
きんあん　五三五
槿花一日　五四九
金尅木　五四三
金氏　五五八
琴詩酒の三つの友　五三九
錦上花を敷く　五五三
謹請東方青龍淸淨　四〇九
金精の妙質火德の明輝　五四四
巾着の夙　四八七
金鐵皆鳴る　五三三
きんなら　五六八
金の冠を被ぬばかり　四七五

く

具一切功德慈眼視衆生　五六八
草にやつるる白露を　四四六
くしきのまど　三九七
櫛になりたやヤレサテ薩摩の櫛に　五一〇
くじふごしゆのげだう　五六八
碎けて物を思へとや　四六六
口が上る　四八七
朽ちたる木をば雕るべからず　五四七
口に針　四八七
口を開こより奥　四八七
口を切る　七二
ぐつ煮　五五二
九土　五七六
國に杖つき九九に餘りし　五四四
國に弓箭動き兵亂のしろしに
は　五五三
國を療治の流行醫者　五二三
苦は色變ゆる松の風　四八七
くばう　四一五
くはうでん　四三六
桑名の衆　四八八
くはばら　四八八
くはぼく　四三三
首に懸けたか時鳥　四八八
ぐふたいてんのかたき　五四五
凹い處に水溜る　四八八
くほんのじやうせつ　五六一
九みやうかうたい　四七六
酌めども盡きず　四〇六
久米の山邊の仙人だにも　四六二
雲行客の跡を埋む　五四九
雲心無き水の面　五三三
雲に汁ができる　四八八
蛛蜘の糸に荒れたる駒は　四〇一
雲の上の鳥は高けれども　四七〇
くものおび　五五五
雲の通路吹きとぢて　四六六
蜘蛛の昔は柳の葉　五五三
くものり　四七九
くらかさ　四二四
暗がりより引出す牛　四八八
暗きより暗き道にぞ　四四九
藏の戸出づる鶯　四七六
くりがた　四七〇
庖に肥えたる肉有り　五五二
車の轍に彼の三升の水に渴ゑし　五二五
車を摧く岩よりも人の心は　五三九
廓住居は時雨の雨よ　五一〇
暮れて行く秋の形見に　四四九
くれなゐは園生に　三九五
くれみぐさ　四七六
黑髪のめでたからんこそ　四六二
黑髪もかかれとてこそ　四四七
會所　七一三 七一五
懷生　五七六
怪は德に勝たず　五三〇
くわうき　四五八
黃帝革を以て鞠を作らせ　四七六
光明遍照　五六一
蝸牛の角　四四九
くわきやうざんまい　五七七
火刑に陷ちし罪人の取付く　五六七
くわきやうへんじやう　五五八
花月がはらの波間より　四一四
くわけんきやうしや　四五八
過去も未來も現世で知る　五五九
過去遠々の昔を思へば　四二三
花前に蝶舞ふ　四二七
ぐわつしのゐりよう　四七六
畫棟朝に飛ぶ南浦の雲　五三三

願以此功德 五六一 五七二
觀音薩埵の誓 五六五
勸學院の雀 四八八
觀經とやらん申す御經 五六二
くわんくわこどく 五四一
關關たる雎鳩のみさごは河の洲に 五三三
關雎は樂しんで淫せず 五四七
勸善懲惡は國政の始めと 五二一
かや
桓武天皇無體の後胤 四一九
くわんやく 五四二
君子あれば仁義あり 四六二
君子ここに心を盡す 五四五
君子其室に居て言葉を出すこと 五二八
君子は宿鳥を射ずといふ 五四七
君子は日に三たび吾身を 五四七
軍讖に曰く良將の軍を綜ぶるや 五二八
ぐんだりやさ 三九六
ぐんでうづよ 四六八

け

刑罪極まつて三度奏す 五四五
霓裳羽衣の一曲に 四五八
傾城こまめにたらひが女房 五一〇
傾城に誠なし 四三一
化一切衆生皆令入佛道 五六八
荆の宣王に江乙が答へ 五三七
刑鞭蒲朽ちて 四二五 五五〇
けいろうの山 四一七
げうふうゆるく吹いてとう日 五五三
げきふさんづきかつはうまん 五七七
外宮は四十末社 四八八
けけらほ 五一〇
下戸なくとも妖物 四八八
下戸ならぬこそ 四六二
華嚴經にて中戸に口說き 五七七
けごんじやくめつだうぢやう 五六三
袈裟まで憎い 四八八
けしたるもの 四一二
化城喩品 五六八
下駄を預く 四八九
月支の遺龍 四七六
けどさんせつ 五七七
げにや安樂世界より今この娑婆に 四一〇
げにや古へも月には千賀の鹽釜の 四一三
げにや花の下の半日の客 四〇四
げにや世世ごとの親子の道 四一八
今日の修羅の敵は誰そ 四二四
今日は漢宮の人にして明朝胡地の 五一三
今日は西都に恥を清むる 五一三
けぼり 二六三
けらはらたつ 四八九
毛を吹いて疵を求む 五六〇
顯 五五六
玄英神 五三八
けんけんふくよう 四六二
現在の果を見て過去未來を知る 五五九
源氏は明石の鯛を釣る 四三四
賢者を得たる渭水の狩 五三三
げんたんの法 五五三
げんぢやくおほんにん 四一〇
げんとうそせつ 五五〇
賢に易へて色を重んじ 五四七
乾に乾を累ぬるは亢龍悔あり 五二九
げんばいによしよく 五六九
乾は元にして亨る貞に利ありと 五二九
蹇は東北に利あらず西南に利あり 五二九
けんびゐし 四五一
げんまいによしよく 五六九

こ

ごう 三七九
こうい 五五三
紅葉の稀に逢ふ瀨 五五四
紅花の春の朝 三九九
孔子は鯉魚に別れ 四一三
孔子は魯國の狩に麒麟を獲られし 五二七
孔子も怪力亂神を誡めらる 五四七
孔子も道行はれずといへり 五四七
勾踐は石淋を嘗め 四七六
狗彘人の食を食へども制する 五四二
後佛はいまだ世に出でず 四七七
公冶長は刑戮にかかる 五四七
ごうん 四五九
古歌にもならちやかや 四七二
金は山に捨て 四六二
吳起が妻を害す 五三〇
故鄉に錦 四〇五
古鄉の北風に勇んで嘶ふ 五四四
ごぎやく 五七七

古今集十戒の和歌　四五三
國城妻子　五六九
ごくに立たぬ　四八九
五月五日の一夜さを　四五〇 四八九 七三四
ごけ　四三三
虎溪を出でし賢人　四一四
苔衣着たる巖はさもなくて　四八九
轉けても土を掴んで起きる
五穀を棄てたる罪業は五逆に　五七七
まさる
ここな子は幾つ、十三七つ　五一〇
爰な塚はと引留め問へば　五三九
ここの木の下　四五〇
ここは竹田か夜は何時ぞ　五一〇
心あてに折らばや折らん　四三九
心ある人に見せばや　四四六
心づくしの秋風　四一〇
心は鬼神と出たれども　四一二
心は闇にあらねども　四四七
心のゆくところ志　五四七
心を種として和歌に和らぐ日　四三九
の本
吳山にあられども笠の雪の重　四一〇
さよ　四一五
こしかた
こしきげんらいけうわうきやう　五七七
伍子胥が餘風　五三〇
五十歩を以て百歩を笑ふ　四四二
腰なは何ぞ　四七六
こしふをん　五六二
ごしやう　四〇七
五尺いよこの手拭　五一〇
こじりがつまる　四八九
こしをよぢらすとも　四八九
こしんのみだ　四〇一
五星の天度十二周天二十八宿　五五一
碁勢弓力は格別　四八九
吳道子が繪主の僧を惱ませし　五五四
ごちのほうくわん　三九五
こちふかばにほひおこせよ　四三三
東風吹く風に飛梅の　四三三
五重唯識の紅葉葉は　四一三
ごぢんろくよく　三九九
五條あたりの軒の端　四三四
胡蝶となつて牡丹花に戯る　四三六
胡敵の一ぞく　五一六
五天到る日頭白かるべし　五一七
五人組　七一三
來ぬ人をまつほ　四六六
この三界の衆生は皆是吾子と　五六九
木の下陰の落葉かくなるまで　四〇九
この婆婆はじまりて　五六二
このたびはぬさ　四六六
木花開耶姫の御神木　四〇五
この日いつか喪びん予汝と　五三五
此世の名殘夜も名殘　四五一 五一〇 四九九
牛蒡も身祝ひ　四五一
小萩がもとを思ふにも　四三四
子は子なりけり鶯の　四七六
子は三界の首枷　四一八
木幡の里か馬はあれど　四五〇
木幡山　四七六
胡馬北風に嘶ふ　五四四
乞ひ得ぬ時は惡心また狂亂の　四〇八
こひぐさ　四四八
戀草の力くらべ　四七三
御祕藏の常世の松は　四五三
戀しき時は烏羽玉の　四三九
戀しくは尋ね來て見よ　四七六
戀せずば人は心のなかるべし　四七六
戀ぞつもりて　四四七
戀路の闇の暗り　五一〇
戀に朽ち果てん　四四六
戀の櫛田の眞中中で　五一〇
戀は曲者　五一一
子程の寶　四七二
氷玉盤に落ちて　四五九
氷に臥して魚を得　五五四
氷は水より出でて水よりも寒く　五三四
氷を歩む御差足虎の尾を蹈む　五三五
心地にて
駒とめて袖うち拂ふ蔭もなし　四一五
獨樂廻し歌　五〇五
小萬泣く泣く申すやう　四五一
小湊口の梅林に舟を乘り捨て　五五四
こむ長刀　四〇四
子守歌　五〇五
ごや　五七七
こゆな　三六二
越ゆる小夜の中山　四五四
暦なき山住　五五四
こらいまれ　五三九
こらんにふ　四〇四
これなる山水の落ちて　三九五
これに懲りよどうさいばう　四八九
これにつけても後の世を願ふぞ　四〇八
これはこの國の傍に下種奉公　四〇九
是は東國方より出でたる僧に　四一三
て候
是は院の御所に仕へ申す命婦　四一一

これやこの行くも歸るも　四六六
これを見るたびに　四二〇
これをも忍ぶべくんば孰れをか　五四七
牛王の裏に誓紙一枚書く度に　四八九
解細細と怨むが如く慕ふが如く　五二四
磨帆にあげて　四三九
子を思ふ心の闇　四四七
子を棄つる藪はあれど　四八九
子を見ること父に如かず　四五九
子を持つて知る父母の恩　五五四
子を養つて教へざるは父の過　五二四
なり　四二一
こんがら　四二九
こんくわい　五五四
昆吾溪の寶劍　四〇九
言語道斷　四六四
こんこんとんとん　五六九
こんしさんがいかいぜがう　五二九
坤上坎下の卦體　五七八
今身より佛身に至るまで能く　四八〇
保ち　五二一
こん泉寺　四八九
紺に鬱金に薄染淺黄　五五四
蒟蒻の錢ぢやとて砂にして　五二四
魂魄結んで天高く鬼神聚つて　昆明池　五五三

さ

さい　三七九
塞翁が馬　五五一
細謹を顧みぬ大丈夫　五三〇
細工はりうりう仕上を見よ　四八九
さいくわきふすゐ　五六九
最期の一念によつて　四五九　五六五
妻子珍寶不隨者　五七八
咲いた櫻になぜ駒繋ぐヨノ　五一一
さいたらばたけ　四八九
才能は煩惱の增長　四六一　四六二
才力を以て人に勝つ者は亡び　四三六
さうこうが淵を求めし父の骸　五五四
莊周が胡蝶　五二六
莊子が夢中に無我有の里に　九二六
相場が悪い　四九〇
草木心なしと申せども　四〇九
草木の雨露の惠みに長ずる如く　四二六
滄浪に冠を濯ひ口すすぐ　五四二
莊王冠の緒を切らせ兵を助けし　五三六
逆樣に開き扇を見るやう　五五四
さがなし　四〇六
坂は照る照る　五二一
酒戻しはせぬもの　四九〇
月代剃つて髪結ひし蜈蚣を流す　五二一
酒屋のしるしに我宿も　四三九
驚は洗はずして其色白く染めず　五二六
驚はだいさいの方をよけて　五五四
先んずる時は人を制す　五三〇
さくさく　四〇八
作文和歌管絃の道　四六二
咲くやこの花今はとて　四一三
櫻川　四四八
櫻狩　四七八
さくら散る木の下風は　四五〇
櫻海苔　四七九
櫻花かや散り散り　五一一
櫻花散りても終に根に歸る　四一三
櫻も八重の奈良草履　四六六
酒には濱松　五一一
酒に醉うて世を見れば萬事は　五二四
酒は愁の玉箒　五二八
酒盛つて尻切らる　四九〇
佐々木が藤戸の浦人を殺せし　四一九
ささなみや　四五七
さされ石巖とならん八千歳　四三九
ざざんざ　四二九
指櫛の蒔繪に似たる松原　四三四
さしもぐさ　四五四
さしも知らじな　四四六
さすかひなには壽福の枝　四一〇
さそくを踏む　四〇四
さそな憐れむ山櫻　四六六
さそふみづ　四三九　四四四
茶道は猊木にもまるる　四一四
左道を執つて政を亂り　五四五
定めなき世に捨てられて　五一一
五月雨　五一一
五月五日の一夜さを　四五〇
さつしよ　五五二
薩摩や三が國に霧雨が降らば　五一一
よな　五一一
さても命はナあるもの　四五一
扨も其後和田義盛　五一一
さても見事なそんれは　四二〇
扨も行平三年が程　四六九
沙頭に印を刻む鴎　四七六
悟とて外に求むる心こそ　四〇五
されもりぢや　四七七
さののくくたち　四一五
佐野の舟橋

澤の螢とあこがれて　四四六
澤水に上るも下るも　四七七
雜阿含經にも四種の馬を說かれ　五六三
さほいうひつ　四五九
さまが土產の菅笠と　五一一
五月雨の一しきり　四五四
さもしやかたがたよ　四〇一
佐夜の中山年たけぬ　四五四
さよごろも　四五四
更科や姨捨て　五一一
さりともと昔は末も　四七七
猿澤の池の面に　三九九
申の日　四九〇
さるひき　四二八
さる程に尾上の鐘の　四〇九
猿廻し歌　五〇五
猿丸太夫が悲しみし　四六六
去る者は日日に疎し　四六二
さをなぐるま　四九〇
三惡　四六九
山影門に入つて推せども出でず　五四一
三界の衆生は皆是我子　五六九
さんがいむあんゆによくわたく　五六九
三歸ばかりたもちし人大魚の　五七八
さんくわ開けて　四〇五
三元三行三妙加持　五五四
さんごくいち　五一一
さんさ　五一三
三十三身の秋の月　四一一
三十三匁が質置いて　四一一
さん上ばつからふんごろ　五一三
三尺の劍の光は秋の霜　五五〇
さんじやくの斬蛇　五五〇
さんせう　五五四
三世の御佛に花奉る　四四七
三千年に一度搏つて九萬里の　五二六
三千の戀草も色香を失ふため　五三九
しにて　五四〇
三千の寵愛唯一人　五四〇
三千の容色　三九九
さんづ　五二七
三度諫めて用ひざれば身を　四九〇
三人寄れば公界　
三年父の道を改めずとは儒教　五四七
の敎　四八五
三百目　
三百六十日紋日が三日足らぬ　四七七
とて　四七八
三百六十目一目に一日を送る　四七一
三部經　
三伏の夏たけ　四一二 五五〇 三九七
さんみつ　五四五
さんらく　四六九
さんらくさ

し

仕合よしで今はお江戸の　五一二
しいう　四〇五
蚩尤が首を表し　四七六
慈意妙大雲澍甘露法雨　五六九
周書に曰く國を治むるに三常
あり　五五五
しうにあつてよく讓る　五二一
周の鼎を棄てて　五二四
周の武王は木主を作つて殷の
世を傾け　五三三
周の武王は渭濱の獵に太公望　五三三
周の文王は羑里の獄屋に入り
給ふ　五三三
周の穆王法の爲八匹の龍馬に　五五五
柔能く剛を制し弱能く强を制す　五六八
しえんはりうじゆ　四七七
しかいなみ　四一〇
白我偈　五六九
しかぞ住む世をうぢ川　四三九
志賀の山越え　四七七
しかまのかちぢ　四二六
しがらみ　四三九
然れば船のせんの字を　四〇五
鹿を追ふ獵師は山を見ず　三九八
敷金　七一五
しきしんのたうたいかいぜ　五七八
色則是空　五六七
しぎたつさは　四五四
鴫蛤の爭　五三七
仕切爲替　七一六
頻に敲く月下の門　五五五
慈救　四六九
四句の文　五六六
しげれ松山　五一二
しげ男　五一七
じげんじしゆじやう　五六九
四三五六社　三七七
ししく　五五九
獅子吼の金言　四一七
獅子身中の蟲　五七八
四十二の二つ子　四九〇
ししふんじん　四〇四

四生の苦輪　四六九
磁石に針　四九〇
四趣　四六九
四種の馬を説かれ　五六三
自證無上道大乘平等法　五六九
紫宸殿に僧正あれば弘徽殿に　四二七
死する時節は人魂飛んで　四九一
死せる孔明生ける仲達を走らしむ　五三三
じせんりの外故人の心　五五〇
しだいこつじき　五七八
滴る水の柳蔭　四五四
したをまく　四九一
四端を具し萬善を備ふ　五三五
七月の十六日　四九一
七尺餘りの蜘蛛の形　四一二
七大八大金剛童子　四一一
しちたらじゆ　四〇六
七珍萬寶より子　四七二
七度結びて兄となり　四九一
七難即滅　五六九
七人の子はなすとも女に　四九一
七百年生きる仙人藥の酒　四〇六
じつかいのわか　四五四
日月は一人の爲に其明を暗ま
さず　四三六
じつさうむろ　三九九
嫉妬深きは三去の一つ　五五五
しづのをだ卷　四七七
しづはたおび　四五四
師弟となつて七足去る　四七七
四條五條の橋の上　四二六
志度寺　三九八
信濃路や淺間の嶽　四三一
じれんこじ　四〇五
士農工商の家にも生れず　三九八
子の燕居せるとき申申如たり　五四七
師の卦　五二九
しのだの森のうらみくず水　四五一
忍びて出づる春日野や　四三一
忍の緒　四九一
しのぶもぢずり　四四二
死は輕くして易し生は重くして　五五五
しはすあぶら　四九一
師走坊主　四九一
しひしば　四六二
慈悲萬行の春の花　四一三
しひんせき　四七一
十界皆成佛の妙經　五六九
十四の炙に水が湧く　四九一
十念の枕の上に　五六二
十萬億土　五七八
十萬貫を腰に附け千歲の鶴に　五五五
十萬里程多少難五天到る日　五二七
十萬里の波立つて伯禹の　五四七
思無邪の三字は神拜の元本　五二〇
汐汲車わづかなる　四二〇
しほじり　四三二
しほやきごろも月にも馴るる　四二〇
しほをふむ　四九一
四慢　四六九
此妙法蓮華經者本地甚深之奥藏也　五六九
諦めてまつはれ藤の棚　四三九
霜のたて露をつらぬく　四三九
しや　四七二
邪婬の惡鬼は身を責めて　四〇〇
嫦娥藥を盜む　五三二
笙歌遙に聞ゆ孤雲の上　五五五
上宮太子は夢殿より唐船に法の道　五七八
上求菩提下化衆生　五七五
上戸の腹の石橋山　四九一
じやうこんさんぼうちゆうぶ　五七八
しおん　五五五
商山の秋の夕は芝蘭を刈る　五七八
しやうじの二法は一心の妙用　四六二
盛親僧都の芋頭　四九一
正直の頭に宿る神風　五四七
上知下愚とは移らず　五三六
賞の疑はしきを重くし罰の　五二八
將の謀泄るる時は軍利なし　四七七
正八幡大菩薩筑紫に　四六九
しやうぶつのけみやう　四六九
じやうみやう居士　五六六
しやうめつめつ　五七〇
しやうれんげのまなこ　四七二
しやが父に似て　四九一
釋迦に經　四〇三
寂光の豆腐茶碗酒　四二三
昔在靈山の御名は　五七八
釋尊のこの法華經を說かせ給ふ時　五七〇
釋尊は母の御爲忉利天に昇り　五七四
じやくはあめ　四九二
しやくは持病にあり　四七五
じやくめつゐらく　五六六
若蘭が織りし錦の歌百花　五三五
じやしやういちによ　四二五

しやしやり　四八二 四九六 四一七
しやすゐのいん　四九六
しやばでんくわうのさかひ　三九七
娑婆往來八千度　五七八
しやもん　四一六
しややり　四九六
衆口金を消し積毀骨を流す　五三〇
充滿吾願如清涼地　五六〇
しゆくじきとくほん　五七〇
祝融神　五五五
種樹郭橐駝が名言　五二四
種種重罪五逆消滅自他平等　五七〇
咒詛諸毒藥念彼觀音力則還著　五七〇
於本人　五四二
怵惕惻隱は仁の端　五四二
須彌山を挾んで大海を飛び越ゆ　四二三
主馬の判官盛久は去年　五三〇
首陽山に蕨餅　四〇五
しゆら　五七〇
衆怨悉退散　五三八
しゆんしやうまきゑ　五三八
春宵一刻千金　五五五
順の字に變の義あり　五〇五
巡禮歌　順を以て正しきとするは妾婦の道　五七九 五六〇 五五九
諸惡莫作　四六九
諸阿修羅等　五七九
稱我名號下至十聲　五五〇
松根に倚てつ腰つきも　五四七
松柏の凋むに後るるとや　勝鬘夫人は大王の一通の文を得て　五六四
しようみやう　三九七
しよきやうしよさんたざいみだ　五六四
諸經中王最爲第一　五七〇
諸行無常　五六六
蜀山の日を迎へ　五五五
式子の君の浮名立つ　四二
食は人の天　四六二 五三〇
諸君の功犬なり　五七〇
諸法從本來常自寂滅相　五七〇
諸餘怨敵皆悉摧滅　五七九
しよろいじん　五三六
白河の法皇祇王祇女　四三一
白玉は何ぞ　四三〇
白玉をどこぞと問へば芥川　五四〇
しらべ合せし三つの緒を　四七七 五五五
白雪かへつて黑し　五〇五
芝蘭の園に入る人はとめねど詩禮を伯魚に示すの銀に翼あるが如くなり　二四二 五五五
白き蓮の露の玉　四九九
素きを後　五四七
白く咲けるといひし物語の風情　四三四
白妙の晒布ほすてふ槇の島　五二二
詩を釣る釣針　五三八
仁ある君も用なき臣は養ふ事能はず　五四四
臣憂ふる時は君ともに憂ふ　五四五
人家煙道絶えて　五二八
心外無別法卽心成佛　五六三
深山に茂る諸木の中歪まず直に立　五二六
しんし　五三七 五五五
しんじがら中より　四七四 四七七
浸潤の譖膚受の愬　五四七
しんしん　五五五
森森たる人品千丈の松の如し　五三五
しんすけ　三一七
しんずゐばんきやうでん　五六三
じんせいぎうばふ　五五五
しんたつざいふくさう　五七〇
脣と齒の加く脣なければ齒寒し　五三七
眞如常住實相中道　五七九
眞如の光　四三五
震の卦雷百里を動かす　五二九
震の卦を下にし離の卦を上にす　五二九
秦の始皇の御顏に巫山の神女が　五五五
しんのしゆじよが母千餘人の親は泣寄り　五六六 四九二
じんばらはらはりたやうん　五七九
しんぶつみせ　四二八
しんぶふさつ　五二九
新町橋を鵲の橋　四五二
臣命を受けし日より寢ぬれども　五二四
秦王武周を討つて破陣樂を作り　五三四 五五五
神を祭ること神の在すが如くす　五四八

す

すうげう　五四二
すうぜう　五四二
すぎたつる　四三九
杉立てる門　四四二
すきびたひ　四〇〇
すきまの風も寒かりし　四四〇
すこしくわん　五二二

すずかけ　四〇八
鈴鹿の鬼神退治　四一一
雀の巣もくふにたまる　四九二
雀の千聲鶴の一聲　四九二
雀の角鼠の牙の禍　五五五
硯の命は靜に動かぬを以て　五二四
すだく　四六九
髓に寥　四九二
酢でさいて呑む　四二〇
捨てても置かれず　四九二
捨てても めぐる世の中は　三九九
すてて んある　五二三
酢につけ粉につけ　四九二
すのこ　四一六
酢の蒟蒻の　四九二
すはらみつ　五六七
須磨の高波はげしき夜半の　四二〇
隅田川の渡守ならば　四〇七
住の江の岸による波　四六六
住吉に立歸り歸朝を待ち申さ
んと　四一〇
住吉の岸の姫松　四三九
住吉の松を秋風吹くからに　四三九
すゐえんしんにょ　三九九
水魚の因　五三九
すゐじやくわくわう　四五九
すゐちやうこうけい　三九九（四一七）
水中の遊魚は釣針と疑へり　四一三
水殿雲廊　五六八
帥の卦　五二九
すゐしら雪の買ひがかり　四〇二
すゐしら雪の薄氷　四〇二
末の大いなるは必ず折る　五二七
末の露本の雫や　四五四
末の松山浦の浪　四四六
末の松山波越ゆる　四三九
すゐるぜん　四九二
松江の港　四七四
すんぜんしやくま　四九二

せ

嗟嘘の卦　五二九
せいげつ　四五九
清十郎殺さばお夏も殺せ　五一二
西施を湖水に沈め　四七〇
青苔衣を負ひて巖の肩にかかり　四一四
せいたか　四一一
青帝　五五五
西鳥來つて東魚を食ひ　四五九
せいのそしんがちうどくのあだ　五三〇
性は善なる涙なり　五四二
西北に風起り　四〇四
せいれう　五〇三
精衞海を塡めし例もあり　五六六
小惡は害なしとして　五二九
少かう　五五五
せうくわん　五二二
小乘四諦の名ばかりを轉りし　五六一
小人の過は必ず文るといへり　五四八
小節を規る者は榮名をなす事
なく　五三一
小善は益なしとして爲ざる　五二九
小智は大道の妨げ　五五一
小敵を見ては　四五九
せうらん　五五六
せうるゐ　五七六
せきあん　五二六
尺蠖の屈めるは信びんが爲　五二九
石上樹下　四七七
節季候　（二〇〇）（五〇六）
せきだい　（二〇一）（三九一）
せきだく　四四七
關路の鳥　四二一
關寺に身の衰への恥かしき　四〇七
關のお地藏は親よりまし　五二二
關吹を越ゆる　四二一
鶴鴿の鳥に習ひし妹背の道　四七七
ぜしやうめつぼふ　五六六
世尊は雪山童子の古　五六六
世帶佛法腹念佛　四九二
せたの長橋をとんどろ　四七七
せつしゆふしや　五六二
せつせつしし　五四八
せつたい　四〇八
雪中の藁沓逆樣に　四七七
背中に腹　四九二
是に似たる非あり　五四二
ぜにまた　（二〇三）（七一九）
是人於佛道決定無有疑　五七〇
葉公龍を好んで畫き刻めども　五六六
瀨を早み　四六六
詮方なみに駒を控へ　三九七
仙家の日月本長閑なり　五六六
仙宮の蛙息を吐いて虹となる　四三六
千金春宵一刻飲み　五三八
せんさんごをくだく　四九九
千秋萬歲の千箱の玉　四一三
せんしうらく　四一〇

宣旨默止難くこれまで供奉　四〇八
僭上大盡寢屋のとぼそに　四四五
前車に懲りず後車の罪業　四九二（五三六）
千手觀音の光を放つて　四一二
千仞の碧潭藍に染み　四五九
せんだんどうの弓　四七七
栴檀の林に入る者は　四五九
栴檀は二葉より香し　四〇八
船頭馬方御乳の人　四九三
ぜんのはし　四九三
宣風坊の北あらたに栽ゆる處　五三三
先佛すでに去り　四七七
せんみつ　四九三
千里の馬の尾に止まれば蠅も　五三一
千里も一歩に始まれり　五四五

そ

僧正遍照が女郎花といふ草　四三九
曾我殿の刈穂の屋根の　四六六
そくげんふにょしんゐせつぼふ　五七〇
そこづつを　四四五
そしせん雨によつて喜雨亭を　五二四
作る
祖師の西來意　五六三
そだまにすだくわうあかだ　五七九
袖打拂ふ蔭もなし　四五四
袖櫻　四六五
袖摺の松　四四三
袖にあしらふ　四九三
袖に涙を拂はまし　四二三
そなた櫛田の眞中ほどで　五一三
そなたこそ狂人よ　四一七
そなたは異國の范蠡　四七〇
そなれまつ　四二一
その爭は君子なり　五四八
その名は言はじ名を問へば　四七七
園原や　四五四
園生に植ゑても紅　三九五
その外おさん鰐の口　三九八
其また女房は太鼓に張つて候　五一二
楚人の一炬に焦土となんぬ咸陽宮　五二四
そぴらに千箭の蘇武は片足を切られても　四四五
添狀　五一一
そみかくだ　七一六
背くとて雲にも乘らぬものなれば　四六六
染めてかへらぬ墨子が白絲　四三一
そも修羅の敵は誰そ　五五一
抑も最期の一念によつて　四二五
そもそも水揚の下前髪の　四九九
そも時は今五月の空　四〇四
空さりげなくせいせいと　四七四
そらだき　四五四
空に消えてはこれも亦　四二一
空に知られぬ白雪　（四五四）
天も醉うたり　（四七七）
それうかうか大もん日　（四七〇）
それ蝸牛の角の上に　五四〇
それ釋尊は母の御爲　三九六
それつらつら惟ん見れば　五四九
それ日本は神國たり　五七四
それはあづまの花よめご　三九六
それは吾妻の物語　四七八
それは若草身をうらみ草　五一二
それ人は四端を具し　四六六
それ法華修行の肝心は信心を　五一二
以て　五三五
それ六字の名號といつば　五七九
楚王宮裏の柳の眉　四一八
楚王虞氏を伴ひ百萬騎を追散し　五三一
そゐん　四〇八
損者三友　五四六

た

たいあ　五六六
第一第二の絃は索索として　四〇八
たいえき　四一三
大恩教主　三九六
大海を手で堰く　四九三
大行は細謹を顧みず　五三一
大學の道明德を明かに　五七七
大義には親を殺す　五七七
大魚は小水に棲むことなし　四九三
大工殿よりナウ鍛冶が憎い　五一三
だいご　四一六
大功は細謹を顧みず　四六六
大黑鉾歌　五三一
大國を治むるは小鮮を煮るが　五〇六
如く　五四五
だいごみ　四一六
だいさいの方　五五四
太山は土壤を讓らず故に積つて　五三七
太山をわきばさんで北海を　五四二

大慈大悲の春の花十悪の里　四一
大将嚴に腰を掛け　四五三
大聖人の御書に提婆が三逆も　五一九
大舜天下を棄つるを視る事　五四三
大事を思ひ立つ者　四六二
大人は非禮の禮にかかはらず　五四三
大千世界　五二一
大地世界を以て　四七八
大丈夫死すれども冠を捨てず　五三一
とかや
大通智勝佛　五七〇
大底四時心惣てねんごろなり　五五〇
提婆が三逆も羅睺羅が二百五　五七九
十戒も
だいばぼん　五七〇
大悲の弓智惠の矢　四一一
大悲の利劍　三九八
たいびやくごしや　五七〇
だいほう　五二六
内裏も虚空に遡るかと　四二八
台嶺の雲を淺ぎ　四一一
たうがれのよんちりよめごは　五一三
陶朱公は勾踐を伴ひ　四一九
たうじんだんだんゑ　五七一
唐人の寐言　四九三
たうのさんせき　五二一
唐の帝の三千宮蝶の宿のさざ　五四六
め言
唐の帝は楊貴妃の別れを憂ひ　四一三
唐へ投げ金　四九三
たうまちくゐ　五七一
螳螂が斧　五二〇
たうり物言はずして女中を招く　五三一
當位卽妙　四七八
絶えなば絶えれ　四六七
高い山から谷底見れば　五一三
誰が狩すとはなけれども　四七八
高き屋に登りて　四五五
高砂の尾上の金も皆になり　四一〇
高砂や此の浦船に帆をあぎよよ　四一〇
鷹は死れども穗はつまぬ　四九三
誰が文も見ぬ戀の道　四三四
高天が原に神留まりました　四七八
高御座日生産日　四七八
寶につながれ　四六一
寶の山に入る　五七九
寶は身の指合　四九三
寶は湧き物　四九三
薪を負へる山人も　四四〇
猛き武士の心をも和らぐる歌　四四〇
武隈の松　四四六
餡藥師　四八三
但馬の湯桁數ふれば我とそも
じは
たじやうのえん　五一三
たそがれ　四一六
ただ一文字に頭に挿せば　四三四
敲　五五〇
たたく　四七八
ただこの儘にお暇と　五〇六
ただ賴め我世の中にあらん限　四二六
りは
ただとる山の時鳥　四七八
橘の木の埋れし　四二六
橘唐人の孝行　四九三
立舞ふべくもあらぬ身の　四三四
立別れ因幡の山の　五五六
龍田川の秋の夕べ　四一九
たつたや沖つ白波の　四二
龍田山神代もきかずと詠じ　四四〇
尋ぬる人もあらじと思へば　四四二
尋れ行く幻もがな　四三四
たて　四三九
蓼の蟲の葷葵を去るは　五四四
蓼は利根草　四九三
田中の井戸　四四八
谿に入らざれば地の厚きを知
らず　五三五
谷の笹原　四六七
谷の水峯の薪　五七一
多能は君子の　四六二
賴みあるなかの酒宴かな　四二八
戯れ遊べやあこれの　五一三
旅にしあれば椎の葉に盛る　四七二
旅の衣は篠懸の　三九六
堪へず紅葉青苔の地　四二三
妙の名は八卷ばかりに　四七八
珠ある淵は岸破れず　五五六
たまかつら　四一五
玉島川にあられども　三九八
玉すだれ小町が歌　四七八
玉津島神詠　四六四
玉と欺く白露の清み濁る世　四四〇
たまのさかづき　四六一 四六二
たまのを　四五五 四六七 三九七
玉を取る思案　四五五
民の竈も富の小路　三九五
たみのの島　五三一
民を以て天とす　四七八
盥の底拔けて

他力　五六〇
誰かあぐべきつくも髪　四三一
誰脱ぎかけし秋の野　四四〇
誰をかも知る人にせん　四四〇
だんあくしゆぜん　五七九
短氣は損氣　四九三
たんしこしやう　五四二
だんじり打つて離した　五一三
だんせつの扇雪なれど　四一八
たんだく　四一二
たんふく　四七八
たんぽ　一三三

ち

近き甲斐なき千賀の　四六九
ちかた　四一〇
力なき蝦　四四八
ちくらのおきどに　四七八
地獄の釜の蓋開く　四九三
智者は惑はず勇者は懼れず　四二五
地主の櫻　四一四
千度見れば千千の思きびし　五三〇
父父たれば子も子たり　五四八
父の讐倶に戴く天の罰　五四五
千千の心をたれとして　四三八 四四〇
父の道を改めぬは孝の一つ　四四〇 五四八
父は長柄の田地持　四七七
蜘蛛かかつて喜來ると云ふ　五三三
ちとくわん　五一三
千歳の坂　四四〇
千年まで限れる松も　四五〇
智は萬代の寶　四九四
千劍破の城の寄手は　四五九
ちはやふる　四四〇
丁銀　二三〇 七一八 五五一
ちやうくわ　四五七
ちやうさいわう　五七一
ちやうじやくうし　五五六
長生殿　四九四
提燈に釣鐘　四九四
ちやうらい　四九四
頂禮高じて尼が崎　五二四
茶を受け手向けをなし一杯に　五二三
忠言耳に逆ひ良藥口に苦し　五六六
仲尼は炊水を受けて衞の國を　五三三
忠臣は孝子の家より出づる　五三一
忠臣は天下の爲門を過ぐるに　五五六
中流に舟を失へば瓠も千金　五四六
ぢよくわ　五一三
女中のすきの青梅が　四四〇
千代にやちよをさざれ石の　四三一
千代もと祈る子　五四〇
女郎狐のばけをして男ばかす　四三一
千夜を一夜に百夜さも　四一三
地を走る獸空をかける翼まで　五二六
椿壽八千春　四九四
ちんぶんかん　五一三
沈や麝香は持たれども

つ

づ
ついしやうごうしはう　一六一 一七〇 五七一
月落ち烏啼いて霜天に滿ちじほ　四〇九
月頭には東にあり　四一九
月毛の駒に櫻狩　四七八
月こそ出づれ朝日山　四二七
月常住の　四六八 四六九 五七四
月月の守神守佛ある故　四七六
月と花なくば　四七八
月にたれ寢て見よとてや　四七二
月の御舟　四七八
月の都の宮人　四七八
月の輪も浮んで薄の波走る　四一一
月は落つる長安半夜の鐘　五二八
月は一つ影は二つ　四三一
月は程なく入しほの　四〇九
月も日も庭より出でて庭に入る　四七八
月やあらぬ　四三一 四三三
月夜に釜　四四四
月をうかがふ猿　四九四
月を招きし扇　五六四
つくからに千歳の坂も越えなん　四四〇
筑紫の旅を菅原や　四三三
筑波の峰より落つる　四四七
筑波山つもる戀しさ　四四七
つくもかみ　四三三
つくりし罪も消えぬべし　四〇九
盡くることなき身の内の寶の玉　五五六
黄楊の小櫛も取る間なく　四七二
蔦の葉の退きも退かれも　五一三
傳へ聞く遊子伯陽は　三九八
傳へ聞く孔子は鯉魚に別れ　四一二
傳へ聞く陶朱公は勾踐を伴ひ　四一九
つちおほね　四六二
つちでにはく　四九四
土は清瓠山は鐵城　四〇三

土も木も大君の國なれば　四一二
頭痛八百　四九四
つづりさせてふ蟲の音　四四〇
筒井筒　五一三
繋犬柱を廻るに異ならず　五五六
彝を秉れば性に本づき智に　五三三
つのぐむ　四四九
角はくはぼく　四三二
頭破作七分如阿梨樹枝　五七一
茅花交りの菫草　四七八
燕はつちのえつちのとに　五五六
つはものののまじはり　四一八
つひにゆく　四四〇
終によるせはありてふもの　四四〇
つぼい　四〇〇
づほくめんさいうけふぐわ　五七九
苔む花出づる月　四九四
つまがくれ　六三三
つましあれば　四三一
つまも籠れり若草に　四三一
罪なくして配所の月　四六二
罪を作れば死して地獄に　五六二
罪を天に獲たれば祈るべき天も無し　五四八
づもくすゐなう　五七一

露霜の白きを見れば　四五五
露と答へて消えぬべく　四三一
露の命を君にくれべい　五一三
露の笹原ヤツトントン　五一三
露の身もあればある世の　四七八
つよきおきめに粟田口　（五一三）（五九八）
つらつら世間の幻相を觀ずるに　四〇一
貫之の言の葉　四四二
釣をぬすむものは誅せられ　五二六
つるさき　六一六
鶴澤　四七五
つるのあは　四九四
鶴は一百六十年にして　五五六
徒然なるままに　四六二
つゐしようごうしはう　五七一
つをひかせん　四九四

て

手活にする　四九五
貞松は年の寒きに彰はれ　五四四
貞女兩夫に見えず　五三一
泥より出でて色染まぬ蓮は花の君　五二四

朝拜殿に尊あれば　四一八
朝來一片の霞を飲む　五二八
てがせ　五七一
手形　七一六
敵に赴く兵の枚を銜んで進む　五二四
手附　七一六
手には取られぬ桂男　四三一
手の舞ひ足の踏みども知らず　五四三
蝶蝶とまれこの枝にとまれ　五一四
蝶の翅の白粉を草に　五五一
手まづ遮る杯　五五〇
手鞠歌　五〇六
手も足も釘になる　四九五
寺から里　四九五
寺々の鐘の聲けふも　四五〇
照る照る月、月照る照る　五一四
天一天上　五一四
てんかくちもく　四九五
傳敎大師の御歌に　四七六
天定つて人に勝ち人定つて　五三一
天子に父母なし　四七九
天清淨地清淨　三九七
天知る地知る　五三三
天神樣　三三五
天智天皇のわが衣手　四四七

天長地久　五四五
殿中ぢや張肱ぢや　五一四
てんどうぶ　四〇一
天にあらば願はくは　四一三
天に日なし　四九五
天に順ふ者は存し天に逆ふる　四九五
貂に成り兎に成る　五四三
天に二つの日なし　五四三
天に向つて唾吐す　五八〇
天の與ふるを取らざれば　五三三
天の網　五四五
天の五潢に火帝入れば天下大いに旱す　五三一
天の時は地の利に如かず　五四三
天は文人の才の盡きん事を恐れて　五五七
天も花にや醉ひ心地　五五〇
天も醉うたり　五五〇

と

とううほふう　五七一
東海の波路遙に行く舟の　四一五
とうがれのょんじり　五一三

東魚來つて四海を呑み　四五九
洞口より一筋の雲無心にして
　鑿けば　五二四
東西海の聖人此心を同じうし　五五七
どうさいばう　四九五
とうじゆ絲に風を含む　四〇五
どうで女房にや持ちやさんす
　まい　五一四
とうとうとなるは瀧の水　五九六
東南に雲起つて　四〇四
東方に降三世　三九六
どうへん　六二〇
とうらい　三七九
どかい三尺ばうしきらず　五五七
科によるべの水にこそ　四一九
時しも頃は建久四年五月　四〇四
時に利あらず雛逝かず　五三一
時は今五月の空　四七九
常盤の松はその昔　三二九
ときみぐさ　四四八
德孤ならず　五四八
毒蛇の口虎のの尾を蹈む　三九六
とくしようどうじ　五八〇
得入無上道速成就佛身　五七一
とくれば同じかすすりぬの水　四八一
とくればもとの道芝に　四八〇
とくわか　五一四
德を以て人に勝つ者は强し　四三六
どこへ行く　五一四
どこやらの男とよそよその女　五一四
處は山路の菊の酒　四三三
所も萩の唐錦　四七九
鎖さぬ御代　五三一
年ある御代のしるしには　四七九
年の内に春は來にけり一臼に　四四〇
居所におもむく羊　五七四
鳶が產んだる鷹　四九五
鳶飛んで天に戻れば魚淵に躍る　五三八
飛ぶ鳥懷に入る時は狩人も　五五七
飛ぶ鳥までも落つ　四九五
問ふには落ちず語るに落ちる　四九五
とぶひの野守出でて見よ　四四〇
飛ぶ螢雲の上までいぬべくは　四三一
問へば言ふ問はれば恨む武藏鐙　四三三
融の大臣の君が鹽釜の浦を　四一三
ともじしもじ　四六一
燈に背向けた顏のあの痩せた　五四〇
纒に取り付きて言ひ殘せし事の　四〇六
友とするに惡しき友七つ　四六三
とも船も戀の道かや　四六七
艫舳に櫓を立て　四六九
友まどはせる小夜千鳥　四五〇
知盛が沈みしその有樣に　四一九
ともゑなみのもん　四一九
どやどや通りのむやむやの關　四六八
虎嘯けば風起る　四一三
とらがなみた　四九五
虎の尾　五三五
とらのをの酒　五四〇
虎の尾を蹈む　三九六 四六〇
鳥威しさりとは鳥威し　五一四
鳥追歌　五〇六
鳥が啼く　四一七
鳥の子を十づつ十は重ぬとも　四三三
鶏の空音　四七一
鶏の鳴く音を　四七一
鳥は高く飛んで矰弋の害をの
　がれ　五二六
鳥は古巢を慕ひ北國の馬は　五四四
鳥邊山の煙立去らで　四六一
鶏を割くに焉ぞ牛の刀を用ひん　五四八
取る手もゆらぐ玉の緒　四五五
泥より出でて泥に染まぬ蓮　五二四 四九五 五八〇
飛んで火に入る夏の蟲　四九五
鳶がかけた南無三　四九五
とんびなき　四四九

な

ないそなないそ　五一四
なななうその太刀な取り給ひそ　四一五
流され人の彼の島で　四六九
なかとうじ　五二四
なかぬ鳥の聲きけば　四七九
中大兄の御歌　四七二
中よい月に戯れ遊べえいえい　五一四
ながらのはしばしら　四七九
長柄の橋も名のみにて　四五七
ながらゐ　四六四
流に耳を洗ふ　五五四
流れもあへぬ紅葉ば　四四〇
流れ行く筏は波に沈むとも　四三三
泣上戸　四九五
鳴き捨てて何方行くらん　四四一
亡き魂よ結びとめんと　四七九
薙刀彼處へからりと棄て　四〇四
鳴く鳥人の末期を知らす　四九五
啼く音血を吐く　四九五
歎きつつひとりぬる夜の　四六七

歎きの中の悦び　四九五
投櫛は別れの櫛とて忌む　四九五
なげそ枕にとがもなや　五一四
なしも礫も打たぬ　四九五
夏來ては錦にまさる　四七九
夏來にけらし　四六七
夏草の茂りて　四四一
撫づとも盡きぬさざれ石　四一五
夏の蟬春秋を知らぬ　四六三
夏果つる扇の女　四七九
七草粥の囃　五〇六
七つになる子がいたいけな　四三〇
ななところ　二六三
七八十四五すつとんとんと　五一四
何事もただ時ぞと思へ　四七九
名にし負はばいざ言問はん都鳥　四三三
名に立つ末のといひ置きし　四三四
難波江の蘆のかり寢の一夜さへ　五一四
難波潟短き蘆の　四六七
なにはづのうた　四五五
難波津の冬籠　四七九
難波に咲くやこの花　四七九
難波の今朝は珍しき　四七二
名にめでてをれるばかりぞ女郎花　四四一
名乘りて過ぐる杜鵑　四七二
苗代水にせき下せ　四四五
なまうだ　四一八
なまくさまんたば　四〇九
なまめき立てる女郎花　四四一
浪舊苔の鬢をこそげる　五五〇
波にゆらるる沖つ船　四五七
波の花咲く櫻川　四四八
浪の緒すげて風やひくらん　四四一 四四二 五七一
なむいうれい
なむきやらちよんのふとらやあ　五六五
南無西方極樂世界三十六萬億　四〇七
なむさん　四九六
南無釋迦牟尼佛南無阿彌陀佛　五七二
南無千手千眼生生世世　五六五
南無や志度寺の觀音薩埵　三九八
ならざかや　四一八
奈良茶かやこの手盛にて　四七二
ならのはの　四四一
奈良の都の八重櫻　四六七
ならの小川　四六六
態に似せて卷子を卷く　四九六
形は鹽尻のやうになん　四三二
成りんじ事をば說かず　五四八
鳴るは瀧の水　三九六 五一五
なれなれなすび秋茄子　五一五
なんえんぶしう　四一三
南枝花はじめて開く　五五〇
汝知らずや我そのかみ　四一三
汝月明かなり　四七九
汝如來の眞實の功德を歎ず　五六四
南浦の雲　五五七
南畝の農夫よりも多く　五三四

に

二河白道　五六二
二合半　四九六 七一八
憎い者は生けて見よ　四九六
二月中旬にふりを獻ずる榮華なり　五六八
二月の雪と散る　五五〇
濁らで澄むや人の心　四八二
濁りに染まぬ心もて　四三九
にしかは　四〇〇
錦着て家に歸る　四八八
西の海靑きが原の波間より　四一五
西の宮　四七四
二十八宿　四〇二 五五一
二星　四二三
二千里の外故人の心　五五〇
にそくさんもん　四九六
にたにたしき首　四六〇
似たりや似たり　四〇〇
にちやうのゆみ　四九六
俄に持たせし提灯の　四三四
庭には金銀の砂を敷き　四〇三
入於大海假使黑風吹其船舫　五七二
にべもしやりもない　四九六
にべもない　四九六
日本は神國たり　四七八
若作障碍卽有一佛魔境　四〇七
にやくじんよくれうち　五六三
にやくにんよくれうち三世一切佛　五六三
女房故に捨てん命　三九八
如却關鑰開大城門　五七二
によがとうむい　五八〇
如劫關鑰　五七二
によしやうりやうち　五六〇
如是我聞心佛及衆生是三無差別　五六三
によせそんちよくたうぐぶぎやう　五七二

によどとくせん　五七二
によにんぢごくしのうだんぶつしゆ　五八〇
女人は地獄の使能く佛の種を絶つ　五八〇（四六〇）
如夢幻泡影　五八〇
人間の私語天の聞くこと雷の如く　五五七
人間萬事塞翁が馬　五五一
任氏がら中より　四七九
仁明天皇の御宇かとよ　四〇〇

ぬ

盜人におひをうつ　四九六
盜人を捕へて見れば我が子なり　四七九
盜みする子は憎からで濡れても寢ん　四九六　四五〇

ね

佞人の詞は甘き事蜜の如く　五四五
甯成乳虎の牙にかかる　五二一
ねざめぐさ　四四八
鼠算用　四九六
ねずみつき　五〇一
鼠も所の男山をみなめし　四四一
涅槃の名殘の雪　四九六
ねびくわんおん　五七二
寢耳に水　四九六
閨の扇は班女が親骨にせかれ　四一八
年年歳歳花相似たり……　五五〇
ねんびくわんおんりきりやく　五七二
念力岩を通す　四七九
念力の矢に當つたからくり的ぢや　四九六

の

野飼の駒の優しくも古郷の風の　五四四
遁れかた野の狩場の吹雪に　三九八
軒の急雨ささめごと　五四〇
のこぎりあきなひ　四九六
殘んの菊籬のもとに手折りて悠悠　五二四
野となら鶉とならん　四三二
咽元過ぎて熱さ忘るる　四九七
野にも山にも積る白雪　四七九
野邊より彼方の友　五二五
のぼればさつさ下れば　五二五
のみとりまなこ　四九七
野守の鏡　四五五
のらがらす　四九七
のわき　（四六一）
野分のあした　（四六三）四六一

は

暴逆を禁め兵戈を戢め　五二七
ばうげんれい　五五七
はうこうだいし　五八〇
暴虎馮河して死するも厭はぬ　五四八
疱瘡に二番湯かく　四九七
はうじ　三九六
ばうしきらず　五五七
坊主憎さに袈裟まで憎き世の譬　四九七
はうそ　五五七
はうび白髪　五四四
ばうふう　四九七
ばうふざん　五五七
方便の僞は罪にあらずと佛さへも　五七二
はかなの戀に朽果てん　四四六
巴峽秋深し五夜の哀猿月に叫　（五四九）（五五〇）
籌策を帷幄の中に運らし　五三一
萩の唐錦　四七九
はぎのつゆ　四四一
萩の戸　四四五
萩の錦　四四六
伯牙が琴も鍾子期にあらざれば　五三六
はくきよい　四一二
白虹日を貫く　五三七
薄氷を履む　五三三
莫邪を鈍しとし鉛刀を鋭しといひ　五二四
はくゆ　五三六
白露江に横はり水光天にまじはる　五三八
はげしかれとは山おろし　四五七
箱根八里は歌でも越すが　五一五
はしがかけたや佐渡屋町　五一五
橋がなければ渡りがない　四二八
はしたかの野守の鏡　四五五
橋のいよこの　五一五
橋柱朽ちゆく身こそ　四七九
走る兎　四一一

芭蕉に落ちて松の聲　四一七
芭蕉の鹿　五四六
芭蕉葉の夢　四一七
裸百貫　四九七
二十重(はたへ)ねて駿河なる富士　四三二
二十(はたち)ばかりの富士の雪　四三二
はちじふしゆかう　五七二
蓮は淤泥より出でて淤泥に染まず　五二四
鉢敲歌　五〇六
蜂に上下の禮あり　四九七
八幡大名　四二八
恥かしや故郷(ふるさと)の道もさやかに　四一七
はつさい　五五七
八歳の龍女南方無垢の成道　五七二
八歳より小學に入り　五五七
初霜に折らばや折らん花の宴　四四一
泊瀬(はつせ)の山颪　四六七
初瀬も遠し難波寺　四二三
初子(はつね)の日　四五〇
罰の疑はしきを輕くせよとい へり　五三五
伐木たうたうとして　四二五
伐木丁丁として山更に幽かなり　五三九
はつをのかがみ　四七二
鴿に三枝の禮儀あり　四九七
鳩の秤にかかる智惠　五六五
花あれば便ち入る　四〇四
はなかつみ　四三六
鼻毛をよまれ　四九七
花咲く頃を埋れ木の　四七〇
はなし目貫　三四七
はなたちばな　四四一
華飛び蝶駭けども人愁へず　五二八
花に清香月に陰　五三八
花に鳴く鶯　四四一
花にまがひの櫻海苔　四七九
花のあたりのみやま木　四三四
花の色移りにけりな　四四一
花の上漕く舟と詠み置きし　四七九
花の盛りは冬至より百五十日　四七九
花の吹雪と詠じけん志賀の山路　四三三
花の吹雪よの吉野山　五一五
花の外には松ばかり　四〇九
花の下(もと)の半日の客　四〇四
花はあらしの頃に　四一七
花は盛りに月は限なき　四六三
花は散りても根に返る　五一五
はなひとしんわう　四五二
花開け香殘りて　三九九
花踏み散らす鶯を打たん　四〇四 四七九
花見の使早馬に　四〇四
花聟と名にこそ立てれ下草や　五一五
花もやうやう景色立つ　四〇四
花や主(あるじ)　四八〇
花より白む嶺の白雲　四八〇
花より外に知られじと　四八〇
花を尋れて山廻り　四二五
花を踏んで同じく惜しむ色も あり　四一九
花を蹈んでは同じく惜む花紅葉　四〇〇
花を見捨つる雁がねの　四二七
花をも憂しと捨つる身の　四一〇
齒に衣着す　四九七
跳馬の障子　四五五
はばかりのせきだく　四四七
ははきぎのまき　四三五
はふらす　四四一
はま　三七九
はまぐりこ　五一五
蛤能く氣を吐いて樓臺をなす　五五七
濱の眞砂と敷島や　四四二 四五三 四八〇
濱の眞砂は盡くるとも　四八一
はまのりよう王　五一五
濱松の音はささんざ　五一五
濱松のねほれてほれて　五一五
はもり　四七三
はやうち　四一六
林にすぐれて高き木の青砥　五四四
はやだま　四八〇
葉山繁山繁けれど　四五五
流行小歌も時につれ　五一五
はらすぢ　四九七
はらそうぎやてい　五六七
はらみつた　五六七
はらわたをたつ　五五〇
はりたやうん　五八〇
巴陵の水　四八二
春秋(はるあき)知らぬ夏の蟬　四六三
春秋(はるあき)の眺を爭ふ　四七三
春知り類に七つ屋の　四八〇
春過ぎて夏來にけらし　四五五
春に育つも花誘ふ　五五七
春の野にあさる雉子　四五〇
春の夜の夢おどろかすくだか けの　五一五
春はごされの伊勢　五一五
春は梢に色々の　四五二
春は梢に咲くかと待ちし　四二五
春は三吉野初瀬山　四二六

はるばるきぬるつまかはに　四三三
はるめきながらかりこして　四〇二
霽れざるに何の虹　五二五
はんあんじん　五二〇
萬箇目前の境界　四二六
盤古王の御代に當つて蒼天の　五三四
ばんじのみやう　四二八
萬事は皆非なり　四六三
萬事無心なり一釣竿　五五七
はんそくたいし　四二九
萬能一心　四九七
はんまちどり　四二九
はんれい　四七〇
范蠡が趣　五二一

ひ

びあうのやなぎ　五四〇
贔屓の引倒し　四九七
ひいふうみいよう　五一五
火打が禁物ぢや　四五二
冷えにも熱氣にもならぬ　四九七
ひえの山の檜の枝に　五一五
ひかん　五三一
引き寄せて結べば露の命にて　四八〇
ひくしよせんひしんしよそく　五七二
ひくてあまた　四三〇
比丘尼歌　五〇六
輓けや輓けや此の車　四一八
瓢顆川に日漱ぎしもかくやと　五六八
提子の水が湯となる　五一五
久しうして敬す　五四八
ひざのさら　（二九八）（四九七）
秘事は睫　四九七
びしゆかつま　四一八
聖人の書に世の中の女たる身は五二九　四六三
美人と呼ばるる女の履ける　四九七
ひだりあふぎ　四九七
ひだりなは　四九八
ひだりまへ　五三六
美女は惡女の敵　五七四
羊の歩　五四八
匱に納めてかくさんか價を　五四八
ひつぶ　五四八
飛鳥にあらざれば飛鳥の心を知らず　五二六
ひてうのかけり　四〇四
飛鳥懷に入る時は狩人も　四九八
一足づつに消えて行く　五七四
人生れて八歳より小學に入り　五五八
ひとく　四四二
人こそ知られ沖の石　四六七
人事言はば筵敷け　四九八
人知れぬ大内山の山守も　四〇四
一度は榮え一度は衰ふる理の　四〇〇
ひとだまひ　四三五
一つ穴の狐　四九八
一つには三惡道に墮ちず　五七二
一つの利劍を拔き持つて　三九八
人でもくゐでも無い　四九八
人の親の心は　四四八
人の父としては盜にとどまり　五三七
人の歎きはおふなりとよ　四四九
人は雨夜の星なれや　四一八
人は神の德によつて　四七五
人橋を架ける　四九八
人は素性が恥かしい　四九八
人は筋目が恥かしい　四九八
一引が千僧供養　四五二
一本松を二木とも　四四七
一夜に變る淵瀬こそ　四四二
丙午の女　四九八
日の本の王孫も御母方は　四八〇
日日に衣寬び朝な朝なに帶緩ぶ五二〇
隊行く駒　五三二
緋無垢干すてふ　四六七
姫君下知して宣はく　（一九六）（四二七）
平等施一切　五六二
平等大惠眞淨大妙法　五七三
百貫に編笠　四九八
百姓と書きて　四六五
百丈の木に登つて　四六三
百丈野狐の話　五八〇
百日法華　四九八
百年經れど衰へは　四〇九
ひやくみ　五七四
百樣知つて一樣知らぬ　四九八
びようのやなぎ　五四〇
鵯比叡の山の檜の枝に　五一六
ひよひよと鳴くは鵯　四一九
ひら　四七三
ひれふるやま　四三五
ひろはば消えん玉篠の霰　四〇二
拾ふ木の實は何何ぞ　五四八
非を改むるに憚なし　五四四
貧家には古人疎し　四五七
頻伽は卵の中にして　五三五
牝鷄晨をつくる　四九八
貧女の一燈

頻婆沙羅王の御子阿闍世太子は五六二
貧は諸道の妨げ　四九八
頻繁として三度顧るは天下の　五三九

ふ

富貴は浮べる雲　五四八
風も形も好き女の　四四一
笛による鹿　四六三
不孝の子は慈ある父も　五四四
深く交はせし睦言は　五四〇
深草の少將　四〇二
深田に馬を駈け落し　四〇二
吹きて亂るる薄煙　四五五
ふくじゆかいむりやう　五七三
ふくでんしゆくじきとくほん　五七三
福德の三方論議　四九八
ふくふじやうふぞうふげん　五六七
ふくみぐつわ　四五七
ふくら雀　四一四
梟松桂の枝に鳴き　五四〇
ふげんざう　四六三
巫山の神女雲となり雨となり好し　五四四
ふしきの弓　四八〇
父子兄弟の間は善を責めず　五四三
富士の煙の上もなき　四五五
ふしゆしやうがく　五七四
膚受の愬　五四八
富士を擧びし鹽尻や　四五二
ふたつもじ　四六三
豕でも鹿でも　四六三
ふだらく　四八〇（六〇一）
藤の花はひまつはれよ　四四三
二日の拂ひ日　七二〇
佛日西天にかくれて　四二七
佛性同體の人間　四一三
佛種は緣より生ずとかや　五七三
佛勝鬘夫人に記を授けて曰く　五五五
ふつつかならぬ山人の　四四二
降つて湧く　四九八
佛法と萱屋の雨は出て聞け　四九八
佛法は海の如しただ信を以て　五六六
佛法不思議王對座　四九九
武帝の漢女を慕ひし煙　四二一
筆は鋭に動くが故に命毛日を以五三五
普天の下率土の濱　五三三
舟歌　五〇六
船端に刻を付けて刀を尋ねる　五五八
船辨慶にあられども　四一九
船のせんの字を君にすすむと書きたり　四〇五
船は新造の乘り心サヨイヨエ　五一六
船よりは鬪の聲　四二五
船を出しやらば夜深に出しやれ五一六
ぶふけいの三字は　五四七
父母います時は遠く遊ばず　五四八
父母の別れには王憂へて亮陰三年　五三五
文が遣りたや室町筋へ　五一六
文月半の空　四八〇
文も見ぬいくのの道や大江山　四三四
籬に立てる女郎花　四四二
ふりさけみる　四六七
振り振り鼓に笙の笛　五一六
ふりわけがみ　四五二
ふりを獻ずる榮花　五一八
ふるは涙か春雨の　四四二
ふるか信濃の信濃のハツア　五一六
文武の花も榮えた　五一六
文王のかこみは方七十里　五四三
文王の靈臺は民悅んで造る　五四三
文王は羑里に囚はれ　五三四

へ

平家平家と千種も靡く　五一六
平砂を白波に照せば　五五〇
瓢簞より駒を出すは張果老　四九九
漂母が惠みし韓信が餉は　五三二
へきやうこう　五三二
へきらく　四二三
臍がお茶をひく　四九九
隔てぬ中の政事　四二八
紅白粉やもろこしの渭流を袖に五二五
蛇は一寸にして　四五七
笈を使ふ　四九九
べんくわ　五五八
辨慶おし隔て打物わざにて　四一九
辨慶搗婦　四二〇
辨財天の寶にも十五童子の子寶五八〇
變成男子の願を立て女人成佛　五八〇
へんてつもない　四九九

ほ

ほいほい酒　五九七
朋友信あるの道　五四三
烽火萬里の詐の後に　四六〇
ほうこうだいし　五八〇
鵬鳥は三千年に一度搏つて　五二六
ほうはつら　四九九
ほうゐとくじやうわうぶつのみ
　くに　五七五
ほくきゆういう　五四三
ほくしうのせんれん　四二四
墨子が白絲　五五一
牧野に戈を倒まにすと傳へし　五三五
ほさぬ袖だにあるものを　四四七
ほじそあかなる額付　五六七
星の妹背の天の川　四八〇
細谷川の丸木橋　四三六
ほそぬのごろも　四二六
菩提は山の小牡鹿　四八〇（五六六）
螢を棄む　五三六
牡丹の胡蝶　五二六
法華修行の肝心は　五七九
ほつしやみだら　五六四
佛といつぱ何者が佛にはなる　四六三
佛の額も三度　四九九
時鳥聞きに北野　四八〇
ほとほと叩く水鷄の鳥　四六三
程もなく誰も後れぬ　四四八
ほのぼのと明石の　四四二
ほのほのほのほの暗き黄昏　四三五
焔を降らし火炎を吹きかけ　四〇九
法藏比丘の浮瑠璃　四五二
法師はもとより木の端　四七一
法輪嵯峨の御寺　四一四
ほほはつら　四九九
ほんかうじやくげ　四六〇
ぼんじやり咲いて匂うた梅の花
　がた　五一六
ほんちやんのらい　五一六
ぼんなう　四二六
ほんらいくう　五六七
ほんりやう　四一六

ま

盲龜も浮木に逢ふ　四〇五
まうししや　五四三
まうしやう　四六〇
孟子粱の惠王に語つて曰く　五四三
まうぜい　四二五
紛はぬ花　四八〇
摩訶般若でも落人のすはらみつ　五六七
槇の露　四八〇
まくず原誰が染めかれし　四五五
枕なげそ枕に科もなや　五一七
枕物にや狂ふらん　四三〇
まくらより跡よりやり手の　四四二
枕を割る　四九九
まくりのみ　四〇二
まげる　四九九
馬子歌　五〇六
まことに今年は此方様も　五一七
まごら　五七五
まさきのかづら　四七〇
また　（二〇三）（七一九）
まだき時雨の秋なれば　四四五
また修羅道にをちこちの　四〇三
また水中の遊魚は釣針と疑へり　四一三
まだ文も見ぬ橋立や　四六七
町年寄　七二三（七一三）（七一五）
町の會所　四九九
睫毛よまれる　四一八
貧しき家には故人疎く　四二一
まづ初夜の　四二七
末世一代教主の如來　四九九
まつたけ　四六七
まつとしきかば　四五〇
松の響か琴　四三五
松の雪暖かげなる　四七三
松のをの千代もと結ぶ　五一七
松は平らか追手馬場先繋ぎ馬　五一七
まづ初春の空色に　四一六
松はもとより烟にて　四五五
待つ夜の鐘も別れの鳥の聲々　四五八
松浦潟領中塵山の石　四五八
まつらさよひめが石となり　四一六
窓の梅の此面は雪封じて　四六三
學んで知るは智にあらず　四七一
まはれば三里　五六四
魔佛一如　四一四
間夫を切らるる　五二九
前に險しき岨後に高き山あり　五一七
幻や定業の限とはいかに　五二五
豆を煮て豆の萁を燃く　（三五七）（四七三）
眉根かき　四九九
まゆをひらく　五一七
迷ひ行けども松山に似たる　四七〇
丸木橋ふみ返して　四九九
眞綿で首を締めらる　四七一
萬戸が其の日の裝束には

萬戸(まんこ)このよし聞くよりも　四七一
萬歳歌　五〇六
まんとくゑんまん　五八〇
萬能一連物　四九九
萬能一心の家業なし　四九九
萬法唯一心心外無別法　五八〇

み

見上ぐれば萬仞のせいげつ　四六〇
みあれ　四七七
見え渡る山々は皆名所にてぞ候　四一三
　らん　四六〇
見下せば千丈の碧潭　四四九
みかきもり衞士の　四四二
みかさと申せ三笠山　四一三
三日月なりの目元の釣針　四五五
みかの原わきて流るる　四八一
三上山の百足を滅し　四四七
みきともつられし言の葉　五〇〇
みくだりはん　四六〇
みけんじやく　五六二
みけんびやくがう　四〇八
みさぶらひみかさ　四五六
短き蘆の難波潟　四一六
見じといふ人こそ憂けれ　六二八
みすぢ　四六六
みそぎ　五二六
みそさんざいの分として　四四三
みそひともじに柔らぐる　四六五
三十一文字の歌　四八一
みそれ霰と隔つれど　五八〇
彌陀十劫に正覺を唱へ始めて　四一八
彌陀頼む彌陀の誓を頼む身の　五四八
道行はれず　四五七
道こそなけれ思ひ入る
盈ちては缺くる影あれば缺けて　五一五
　も　四七三
陸奥(みちのく)の黄金(こがね)の花ぞ　四四二
陸奥の信夫もぢずり　四五八
道のべの清水が店　五六〇
密　五〇〇
水入らず　五〇〇
水が湧く　四七三
水莖の岡の葛原　四二一
三瀬川絶えぬ涙の　四一三
水滔々として波悠々たり　四八一
水たまられば月影も　四四一
水に近き樓臺はまづ月を得るな　四一七
　り　五八〇
水の月取る猿　五〇〇
水の流れと身の行方　五二一
水は石が鑽(きり)にあらずして　四四八
みつばよつばのとのづくり　四二五
水や空空行くもまた　四六三
六月祓またたかし　四四七
みなの川　四二七
南を遙に眺むれば　五〇〇
身に金が入るとて斬らるるが上　四四二
　夢　四〇五
身には繩口には綿　四二一
身にも及ばぬ慰をさへ　五〇〇
見ぬが佛聞かぬが花　四八一(六〇一)
みねうつ浪は三熊野の　四五〇
峯の松風琴の音に通ひ　四八一
みののを山の夕時雨　五〇〇
身の蜂拂ふ　五四〇
身は習はしの汐風や　五七三
御佛も衆生の爲の親なれば　四四八
三保の松原に天の羽衣盗まれし　四一五
三保の谷が着たりける頭巾　四〇一
身亡びんとするときは災害　五六七
みもひもさむし　四四八
みやうかい　五六一
みやうだう　四〇六
みやうぶ　四一一
みやうわう　四〇三
都方には亡き魂を迎へて歸る　四八〇
都ぞ春の錦小路　四四三
みやこどり　四三三
都の人の足手影のなつかしと　四〇七
都まで響き通へる　四四二
みやましげやましげくとも　四五六
深山(みやま)のその奥山のこけ猿　四三〇
みよしのの吉野の川の　四四二
三世(みよ)の御佛に　四四八
みるめ　四五〇
視る目嗅ぐ鼻　五六四
みろく　五八一
見渡せば松の葉白き石橋山　四一九
見渡せば柳櫻をこきまぜて　四四二
三輪のしるしの神杉を　四四二
三輪の山いかに待ち見ん　四四二
身を棄つる藪　五〇〇
身をすててこそ浮む瀬もあれ　四八一
岷江(みんがう)の水上觴をうかぶるも　五五八
明の金氏は女なれども　五五八

む

むあくぜん　四八一
昔は巖窟の洞に籠められて　四三六
昔男の芥川　四三二
昔男のこの山を二十重れて　四三二
蜈蚣の唾　五〇〇
向ひ通るは清十郎ぢやないか　五一七
向臑からでつかちない光物　五〇〇
麥搗歌　五〇七
葎生ひて茂れる宿のうれたきに　四三二
むくりこくり　五〇〇
武藏野の草より草に　四八一
武藏野や我ぞ籠れる若草に　四三二
武藏坊辨慶が雪中の藁沓　四八一
むしの罪障を消滅す　四五八
無常の急に來ること　四六三
無盡意菩薩無量百千萬億　五七三
結びとめ繫ぎとめん　四八一
結びとめても留まらぬは　四八一
むすぶ　五六五
鞭の影に驚く馬皮を打たれて　五八一
六つの巷の聲に　四一三
棟木を負ふの柱をして南畝の農　五二五
夫
むにむさん　五七三
胸のほむらは夜に三度　四八一
胸を衝く　五〇〇
むべも富みけり　四四八
むみやう　四二三
梅に年取る驚の　四四三
埋れ木のみのなる果こそ　四七〇
むやむやの關　四六八
むらさき　四四三／五四八
むらさきすそご　四二五
紫野ゆき標野行き　四七三
紫も色の名　四三五
村雨の露　四五六
無量の生死今に於て盡せり　五六〇

め

めいかい　五六一
冥途の使誰をかも　四六四
明王の佃獵には　五四三
明王は一人の爲に其法を枉げず　四二六
茗荷は鈍根草　五〇〇
めうしやうごん　五七三
妙法の經力にて卽身成佛　五七三
妙法蓮華經　五七三
目が黑い　五〇一
めくさりがね　五〇一
巡り見る浮世の波に比ぶれば　四八一
めぐりめぐりて行く水の　四八一
めぐる月日僞りの　四七五
めしろ　五〇一
めだか　五〇一
娶る時は必ず父母に申す　五四五
目に見えぬ鬼神も　四四三
目の鞘外す　五〇一
目恥かしい　五〇一
目元にしほがこぼれる　五〇一
めをぬく　五〇一
牝鷄が時をつくる　五三五
緡蠻たる黃鳥丘隅に止る人として　五三七
めんらう　四〇四

も

もくれん　五八一
目連七月の供養も專ら　五六〇
藻鹽草いせをの海人にあられど　四三五
もち月の引馬や　四五一
もちまろちやうじや　五〇一
持つや田子の棒　四一三
もとよりもこの島は鬼界が島と聞く　四〇六
藻に棲む蟲のわれから　四四三
物思ふ心の闇に迷ふ身は　四四七
物食ふ時んば物言はずと論語に　五四八
ものぐるほし　四六四
物に譬へて得申すまいよの　五一七
物に尾鰭が附く　五〇一／三九五
物の名も所によりてかはる　四八一／四四八
ものみぐさ　四二四
ものものし　四二四
紅葉踏分け鳴く鹿の聲　四四三
紅葉も靑き稻荷山　四四五
紅葉分けつつ行けば　四八八
百度戰つて百度勝つは　五五八
百年に一年足らぬつくも髮　四三三

百夜も同じつれなさの　四〇三
森の下浮かれ烏の告げ渡り　四三〇
森の下風木の葉の雫　四〇八
唐土春秋の會盟牛の血を　五五八
もろこしのえんし　五四六
唐土の聖王は八人の王子を　五五八
唐土の紹蘭夫婦が中立の昔を引　五五八
き
唐土の大祖皇帝は韓王堂に　五三四
唐土人の褒め言葉咲くや此の花　四三四（四三四　四六六）
もろともにあはれと思へ　四六四
兩刃の剣にて人を切るに　五七三
文珠菩薩釋尊の御法を受け　四七七
紋日が三日足らぬとて　五三五
門設たりと雖も常にとざせり　五八一
もんもんふどう八萬四千　五三二

や

やあんやうりうしやう　五一八
夜遊の舞樂も時去って　四二八
やいましよ　四六〇
やういう

養由が矢に啼く猿　五五一
陽に向へる花木は　四一七
揚雄が甘泉の賦を作り　五四四
やうりさんあくだうそとば　五六六
燒鳥に攀　五〇一
厄拂　五〇七
疫病の神で饗を取る　五〇一
八雲立つ出雲八重垣　四六五
屋島院宣の請文に　四七〇
やすだいじ　五〇一
やつぼ　四〇八
柳渦巻く木蔭には風ありと知る　一九六　四二七
柳櫻もこきまぜて　四四三
柳櫻をこきまぜて　四四三
柳原の法印樣　四六四
柳町　一八〇
野に伏兵あれば歸雁つらを　五五八
藪から棒　五〇一
やぶにこうのもの　五〇二
破れ車でわが惡い　五一八
敝れたる藁沓を脱ぎ棄つ　五四三
やへがきつくる　四六五
八重櫻今日九重の　四六七
やへむぐら茂れる宿　四六七
やぼてりがき　四五二

山青く山白くして雲來去す　四二七
山姥は山路にて　四二六
山海のさちがへせし神代　四八一
山賣りの山こかし　五〇二
山影のうつるか水も青き海の　四一五
山櫻花より外に　四六六
山里の春の夕暮來て見れば　四二三
山田畠の鳥威し　五一八
山田守られど世にあきし　四八一
山寺の春の　四五六
夜摩天の契りは抱き合ふと聞く　五八一
大和歌は天地を動かし　四四三
大和國天の香久山といふは　四七三
山鳥の尾のしだり尾　四五〇
山に登らざれば天の高きを知ら　四七三
ず
山の芋が鰻になる　五三四
山の芋で足突く　五〇二
山の奥にて鳴く鹿　五〇二
山の奥にも鹿ぞ鳴くなる　四五七
やまのかみ　五一八
山の井の水は濁れる　五〇三
山は鐵城水は清鮫　四八二
山人の薪に花　四〇三
病は少し癒ゆるより起り　四四三　五三六

病除の爲ならば南天と大蒜　四八二
山復山何れの工か　四二六
山また山に山めぐり　四二六
山も見えざるかりそめに　五一八
闇のうつつなや　四四三
闇はあやなし梅の花　四四三
やみらみつちやのかはぶくろ　五〇二
病む目より見る目　五〇二
やもじ　四〇四
やよや待てなれよ　四四三
鑓の權三は伊達者　五一八
やれ湯のだんこだんこ

ゆ

ゆがのほふすゐ　三九七
ゆがみ　四〇〇
雪ならで涙に袖を拂へとや　四三
雪は鷺毛に似て飛んで散亂し　四一六
雪は五穀の精たりと唐人も　五三三
雪は豐年の御つぎ物の世なるか　五三三
な
雪を積む　五三六
雪を踏んでは花かと惜む嵐かげ

の
雪折竹に本來の面目を悟り　五一八
行先に的が立つ　五六三
行く水と過ぐるよはひと散る花　五〇二
と
行く水に數かく　四三一
行く水の流れは絶えずして　四三三
行方定めぬ道なれば　四二四
行方も知らぬ思ひ草　四一六
行くも歸るも別れては　四七七
行くもちんつ歸るもちんつ　四六七
行くも山崎歸るも山崎　五一八
ゆつのつまぐし　四六五
湯の山の道連れ　五〇三
ゆふがほ　四三五
夕立の空さりげなく　四三六
ゆふつけ鳥關より西　四五一
夕あしたの鐘の聲　五一八
夕を送る遠寺の鐘　四六〇
ゆふみぐさ　四四九
弓矢の藝その爭は君子なりと　五四八
夢現とも分かざるに女性の月に　四一七
夢路は六つ　五五八
夢にだも周公を見ず　五四八
夢に見てさへ一富士の　五〇三
夢の中に胡蝶となる　五一七
夢の間惜しき春なれや　四二七
夢の夢こそあはれなれ　五二七
夢は一富士、似たかよ蔦の山　五〇三
夢は如夢幻泡影とて　四六〇
ゆやのまへ　四二七
ゆるぎの森　四五六 四八二

よ

好い中の垣　五〇三
よき衣着たる商人も　四三八
善き友三つあり　四六三
よき光ぞと影たのむ　五一八
好き女のなやめる形　四四三
欲界の四王忉利天夫婦枕の　五八一
よくしやうがこく　五七四
よこぐるま　四〇三
世擧つて皆濁れり衆人皆　五五八
與作思へば照る日も曇る　五一九
與作丹波の馬追なれど　五一九
夜さ來いといふ字を金紗で縫は　五一九
せ
よさこいの玉章翼にかけて　五一九
よしのの川のよしや　四四三
吉野初瀬の花よりも紅葉よりも　四三〇
よしのやま　五一九
よしみよしみの言の葉に　五四〇
よしや思へば定めなき世は　四一七
よしや誰にもせよ上萬の　四三三
よしやよしかかれとてこそ　四八二
よしや世の中に落つるや妹背山　四四二
よそにのみ見し白雲の　四〇一 四五六
よそに見て歸らん人に　四四三
餘所に見て高間の山　四五六
よつじろ　三六二
世の中に絶えて　四四三
世の中は兎にも角にも假の宿　四〇八
夜の涙なそへそ　四五六
夜は何時ぞ五つ六つ四つ　五一九
夜半にや君が一しぐれ　四三八
世は芭蕉葉の夢　四一七
齡久しきためしには　四四四
宵々に脫ぎて我が寢る狩衣　四二一
よぶこどり　四四四
よみ人知らず　四四四 四六五 五〇三
よめ遠目　四七一
よめのふし　四二四
蓬が島つ鳥　四二四
蒿食み呦呦として鳴く小牡鹿　五三三
夜も更け星も流るる　四二二
賴朝昔の厚恩を忘れ　四七〇
夜かと思へば日はまだ高し　四〇三
夜の衣をかへす　四四四
夜の鶴　五〇三
夜夜は我もこがれて　四八二
よろづにいみじくとも　四六四
世を厭ふ人とし聞けば　四五六
世をうつぜみの唐衣　四二六

ら

らいし　四〇六
老陰かへつて一陽の氣に　五二一
老聃は漢の武帝に玉の枝を　五五八
老武者の悲しさは　四〇五
老陽金尅木火尅金　五五八
狼羸の身　四七〇
らくてん　四一五
樂天が三が頭　四五八
らげつ　三九九
らごゐちやうし　五七三
羅城門の變化が渡邊の伯母に化

け

らせつ
落花枝に歸らず　四八二
らんかん
蘭菊の狐川　三九六
蘭省の花の時　四二五
らんのかぢ　五四〇
鸞輿屬車　四一〇
らんる鳥　五五〇

り

りう
六宮の粉黛も色を失ふ　五五九
りくせき
梨花一枝春の雨を帶ぶ　四〇七
りくわう
利劍卽是彌陀　五四四
驪山宮長生殿のささめごと　五六四
驪山の春の匂ひ水膚の　三七九
りせんせき
兩眼盲ひさせ給ひ　五四〇
良禽は木を相て棲み忠臣は　四二四
りやうけと書きて　五三二
良將の軍を綜ぶるや　五八一
梁帝が龍を投ぐ　五三二
りやうゐん
兩刃の劍にて　四六四
良藥は口に苦く忠言耳に逆ふ　五三三
りやうこふしぎ
りやくこふしぎ　四六〇
りやつかう
隆車にむかふ螳螂が斧　五七三
龍畜蛇身の女人の身の南方無垢　五八一
りゆうによ
龍吟ずれば雲起り　五七七
りようもん
龍門原上の土に骨は埋むとも　五四三
りよくりん
呂洞賓が袖の中の青蛇を　五四〇
離離たる馬目連連たる雁行　五五九
林間に酒を煖めて紅葉を燒く　五五二
りんきしんきとなまめきて　四二一
りんきやうのほうじ　四四二
りんげん
臨終の一念に攝取の光明を期し　三九六
臨終の一念は無量劫を引くとい　五〇三
ふ
りんちやうげ　五六六
鱗は仁獸にして生けるを食はず　三七四
鱗は德を以てして形を以てせず　五三五
りんりん
磷磷　五二五

る

るしやなぶつ
流轉三界中　三九六
　　五八一

れ

禮儀三百威儀三千備つたる唐土　五五八
れいたい
遼遠東南の雲を起し　五四三
れんぢやくしりがい
戀慕の闇に暗がりによしなき　三九六
　　五一九

ろ

ろうてう
籠鳥の雲を戀ふ　四六四
蹂菊の新花一半黃なり　五五一
六字の名號　五七九
ろくしゆしんどう
六種の夢　五五九
ろくぢん
六塵の樂欲　三九九
盧山の雨の世捨人　四六一
盧生が見し榮華の夢　五五一
　　五五九

わ

王羲之趙子昂が石に入り木に入
る　五五九
わうくわんしゆぢく
往時渺茫として夢に似たり　五六三
王者は愛を以て政を私せずとか　四二一
や
王は十善・神は九善　五五一
わうらい
王良が祕密の鞭　五〇三
わがかど
わが門に千尋あるかげと詠ぜし　三九六
も
若草に妻も籠れり　四五八
若草の妻も籠れる駕籠の中　四四八
わが國の扇に歎く古も　四三三
我が黑髮の髻際　四六四
　　四四八

わがころもでと諸共に　四六七
わが衣手の御製　四四七
わがせこが來べき宵なり　四一一
わが立つ柚の比叡山　四〇二
我が夫の雲井を出でしは卯月の　四一八
　空
我が手の内に雀あり生きたるか　五八一
わかの浦にしほ滿ちくれば　四七三
和歌は天地を動かし　四四四
我が身はもとの身なれども　四三三
若紫の武藏野や　四四四
別れを天外に求むれば　四八二
別れを歎き悲みて　四八二
わぎもこ　四七三
わくや　四〇八
わくわうどうぢん　四六〇
和國の天子の勅の使　四二四
轍の鮒の水をこふ憂きめ　五〇三
渡つた渡つた光る君の渡つた　五一九
和田のそこづつを　四四五
渡らば中や絶えなん　四四四
わびぬれば身をうき草の　四四四
わらをたく　五〇三
われおちにきと　四四一
我が戀路は絲なき三味よ　四四四
我遁世の昔より衰老の今に至つて　五六〇
我ならなくに　四一三
我には辛き葛城の　四〇一
われはまた賤の男が　三九五
我も木蔭にいざ立寄りて　四一二
われ世の中にあらん限はただ頼め　四一六

ね

遺愛寺の鐘は枕をそばだてて　五四一
井の中の蛙　五〇三
渭濱に釣せし太公望　五三二
遺龍　四七六

ゐ

ゐいゐい鵜がな　五一九
ゐいゐい山崎山崎　五一九
ゐいゐいゐいゐい、紺屋の　五一九
ゐいゐい〈〈〈〈、紙屋の　五二〇
醉うたとさ醉うたとさ　五二〇
衞士の焚く火は　四六七
ゐしやぢやうり　五六六
越鳥南枝に巢をかけ　五八一
繪の事は素きを後　五四四
烏帽子の懸緒を切る　五四八
ゐんいつこんて　五三六
圓々極々　五七二
　五六〇

を

をかざきぢよろしゆ　五一〇
小笹に露のたまられぬ　五四七
をじかのその　五一〇
牡鹿の鳴く音は　四五二
敎へずして殺すを虐といひ　四一七
伯父が甥の草を刈る　五四八
をちこちのたづきも知らぬ　五〇三
夫を慕ひ石になつたる女もある　四四四
男でもくひでもない　五五九
男と女郎花　五〇三
男は當つて碎けいぢや　四四四
男は裸百貫　五〇四
男山からこいこいと　四四一
男山さかゆく　四四四
男山をみなめし　四四四
男女の中を和らぐる和歌　四四四
一昨日來い　五〇四
小野とはいひて薄生ふ市原野　四〇三
　四八二
斧の柯も自らとや朽ちぬべし　五五九
をばうちからす　五〇四
をばをからす　五〇四
をひれ　五〇四
折らば落ちなん萩の上の露　四三五
をりみぐさ　四四九
尾を見せる　五〇四
をんざ　五〇四
をんぞうゐく　五六六
女嬬やる高野の山になぜに　五一〇
女さかしうして牛賣らぬ　五一四
女婆と三輪の神　四一三
女とも見えず男なりけり　四一八
女に餘んの布あり男に餘んの粟
　あり　五四三
女に家なし　五一四
女の猿智惠　五〇四
女の履ける足駄にて　四六四
女は相見互ひ　五〇四
女は氏なうて玉の輿　五〇四
女を娶る時必ず父母に申すと　五三三
　（終）

假名遣の不明な時は、この表によつて類似音のいづれにも當つて檢索すること。

						長音ウ					長音フ		
ア		イ	ヰ（ヒ）	ウ	（フ）		エ	ヱ（ヘ）	オ	ヲ（ホ）（フ）	アウ アフ	オフ ワウ	ヲウ
カ	クヮ								コ		カウ カフ	クヮウ コフ	
ガ	グヮ								ゴ		ガウ ガフ	グヮウ ゴフ	
キャ				キュ		キウ キフ			キョ		キャウ ケウ	ケフ	
ギャ				ギュ		ギウ ギフ			ギョ		ギャウ ゲウ	ゲン	
サ									ソ		サウ サフ	ソフ	
ザ		ジ	ヂ	ズ	ヅ				ゾ		ザウ ザフ	ゾフ	
シャ				シュ		シウ シフ			ショ		シャウ セウ	セフ	
ジャ	ヂャ			ジュ	ヂュ	ジウ ジフ ヂウ			ジョ	ヂョ	ジャウ ゼウ	ゼフ ヂャウ	デウ デフ
タ									ト		タウ タフ		
ダ									ド		ダウ ダフ		
チャ				チュ		チウ チフ			チョ		チャウ テウ	テフ	
ナ									ノ		ナウ ナフ		
ニャ				ニュ		ニウ ニフ			ニョ		ニャウ ネウ	ネフ	
ハ									ホ		ハウ ハフ	ホフ	
バ									ボ		バウ バフ	ボフ	
パ									ポ		パウ パフ	ポフ	
ヒャ									ヒョ		ヒャウ ヘウ	ヘフ	
ビャ									ビョ		ビャウ ベウ	ベフ	
マ									モ		マウ マヲ		
ミャ									ミョ		ミャウ メウ		
ヤ				ユ		イウ イフ ユフ			ヨ		エウ エフ	ヤウ ヱウ	
ラ									ロ		ラウ ラフ		
リャ				リュ		リウ リフ			リョ		リャウ レウ	レフ	
ワ	（ハ）												